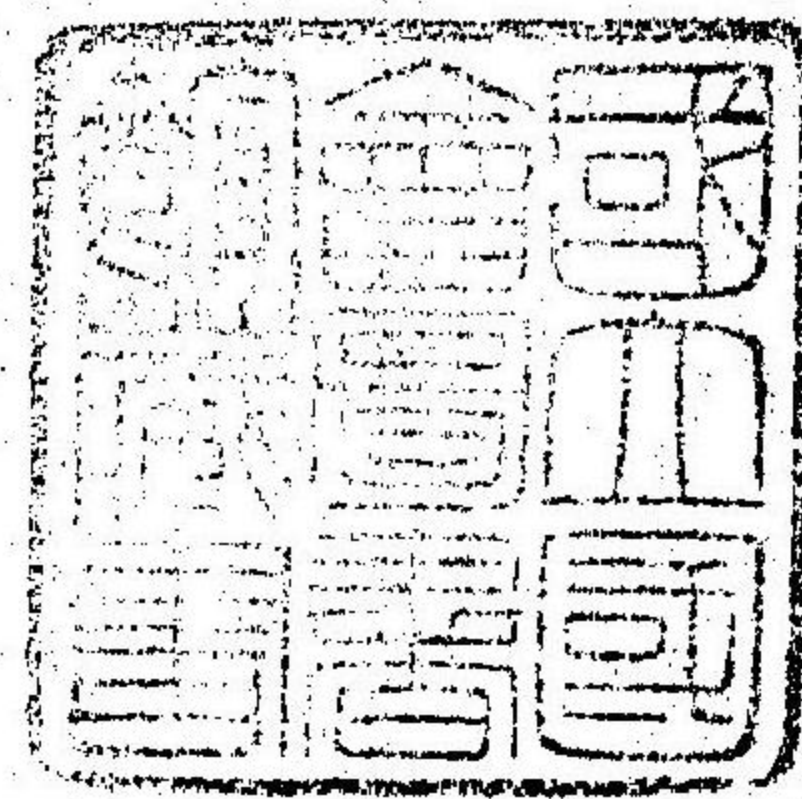


江戸名所圖會  
一十

W245

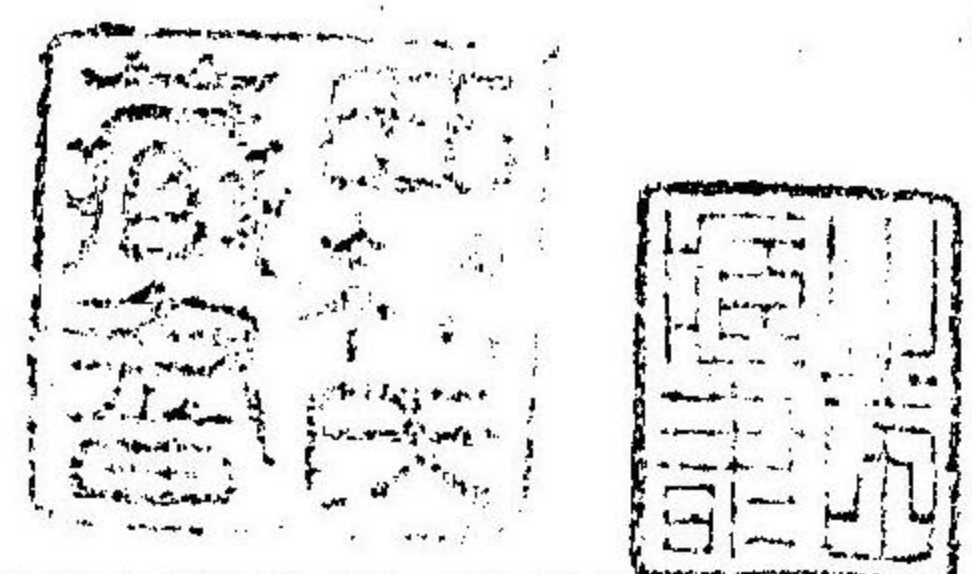
20

W245  
20



寄贈  
西村妙子殿

56.10.-5  
81W51783



武藏國總社六所明神社 府中驛路の左側あり延喜式内大

麻止乃豆乃天神社是なり後世小至るく同く式内小野神社を

合せ祭る故小今両社一社の称あり神主ハ猿渡氏其餘社司

社僧皆奉祀す

本社祭神 大己貴命 相殿 素盞鳴尊 伊弉册尊

瓊々杵尊 大宮女大神 布留太神 以上六神これと俗よ

天下春命 瀬織津比咩命 稻倉魂大神 以上三神これと客来

とく九神合せて共六所宮と称す此三神のハ一宮と小野神社との条下ニ詳なり

延喜式神名記曰 武藏國多磨郡八座

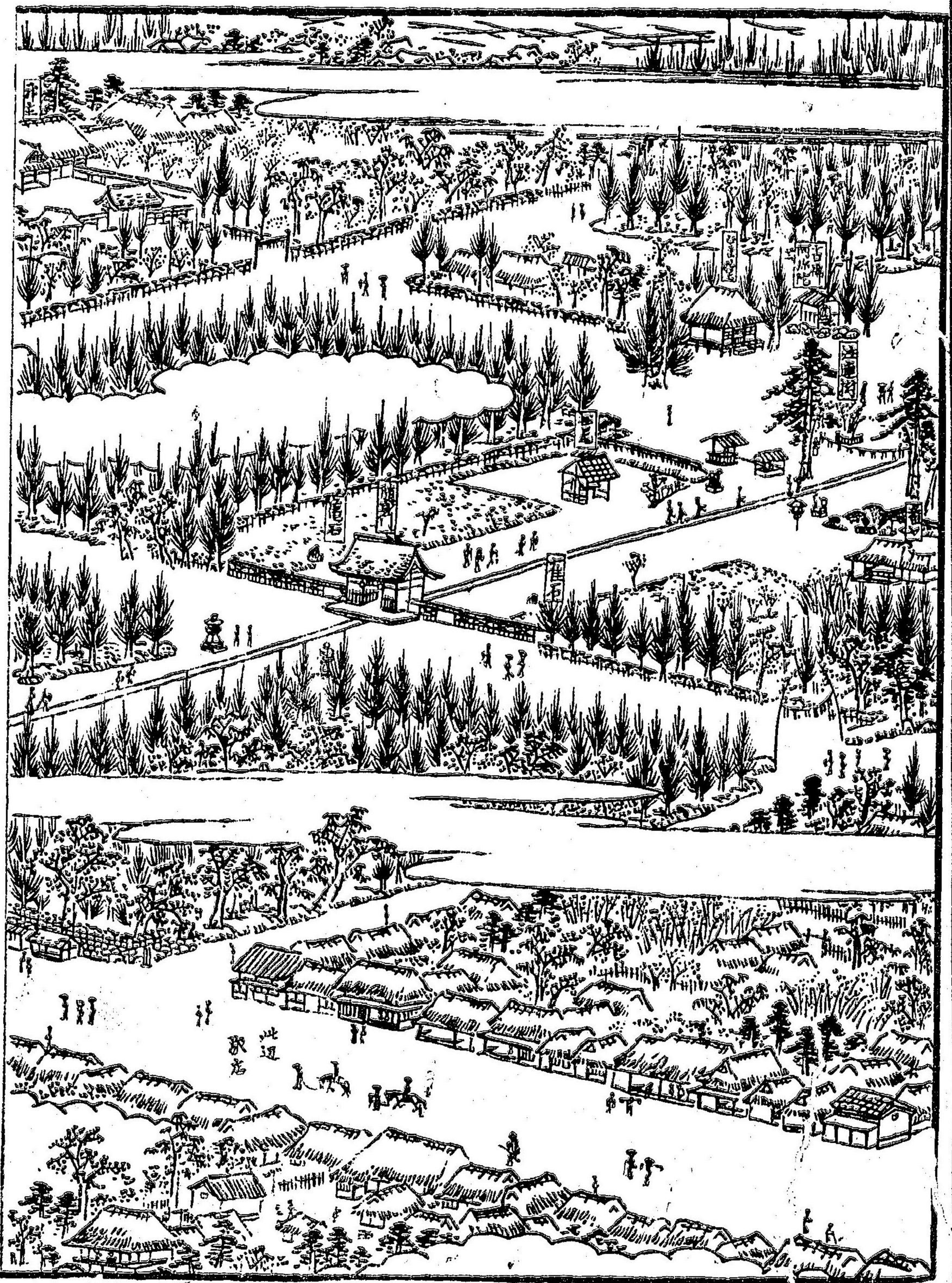
大蔵國風止乃智貴命天多磨郡六十七東六毛田

大蔵國風止乃智貴命天多磨郡六十七東六毛田

東 所祭之大巳貴命也安開天皇乙卯始奠宮社花時以

葛伊御鑑花所大蔵國風止乃智貴命天多磨郡六十七東六毛田

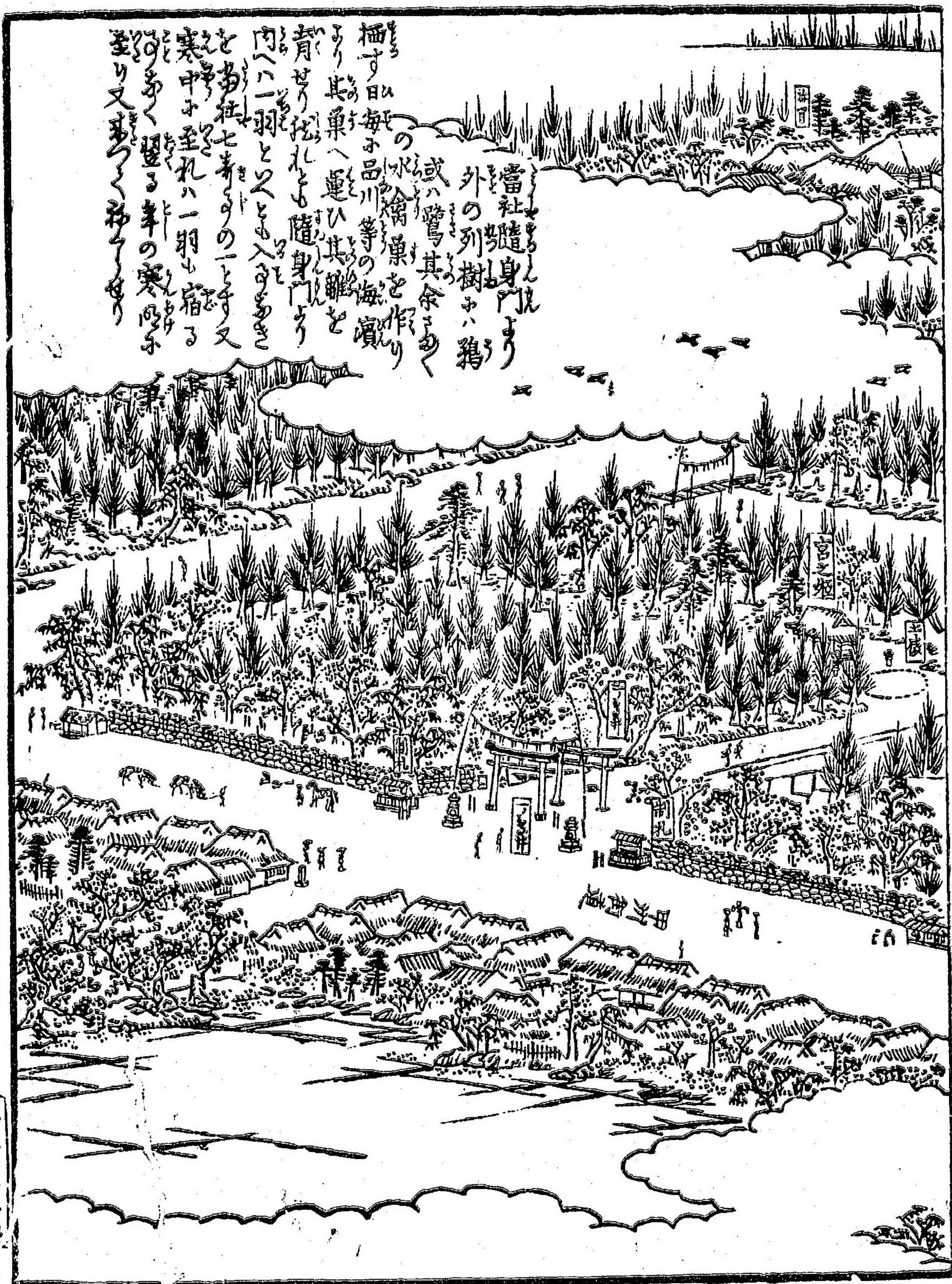
府中六所宮



小野宮と分倍の境府中  
より関戸へ行道ハ  
往昔奥州より鎌倉  
への通路なりとこれを  
陣海道と稱する  
と伝説より永享  
の阿蘇戦争の地  
とあり  
字ハ  
六所宮  
と云ふ

陣海道

此道



當社隨身門外  
 外の列樹ハ鶴  
 或ハ鷺其餘ハ  
 桐ノ木等川等  
 其葉ハ運ハ其  
 背ハ一羽ト入  
 内ハ一羽ト入  
 寒中ハ至レハ  
 至リ又ハ至リ

同書曰 喜四年二月二十四日武藏國六所宮拜

殿破壞有修造之儀武藏左衛門尉資類奉行云云

本地堂 社左ノ中ニハ釋迦ノ坐像ニテ觀音ノ地ヲ示ス

大般若經持讀ノ此堂ノ神輿庫 同ノ並ニあり

阿彌陀如來錢像 同ノ並ニあり

又同ノ藤原氏トニ所ニテ同ノ文字ヲ鑄上中ニ

庄司重忠愛媛ノ菩提ノ為ニ造立スルノ儀

重忠ノ造立ノ儀ニテ同ノ重忠ハ元久二年武藏國二俣河

建長五年元久二年ノ四十八年ト歷スル後ノ年

此ノ銅像ハ當國ノ國領寺ニ安置スルノ儀

此ノ銅像ハ當國ノ國領寺ニ安置スルノ儀

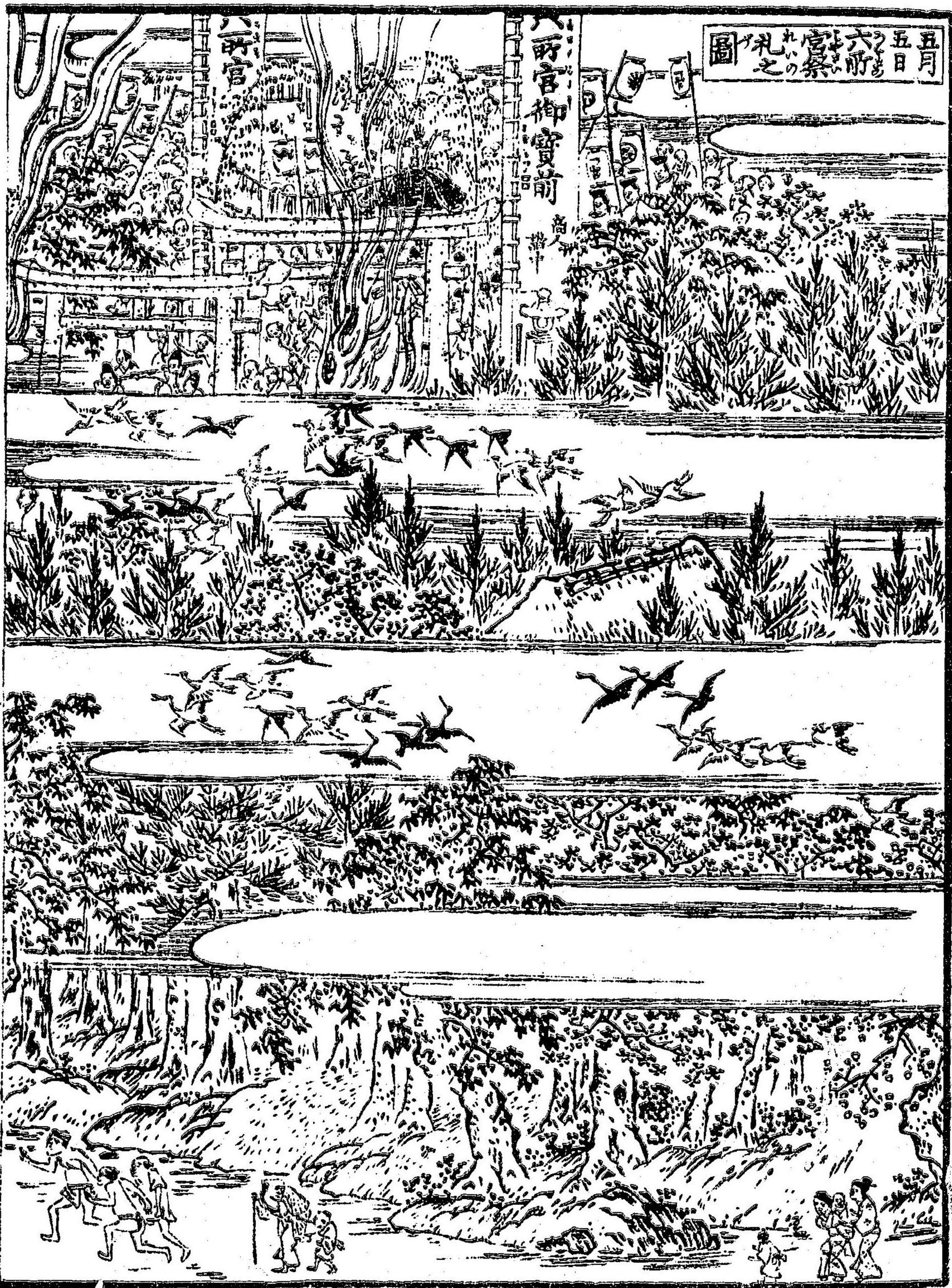
此ノ銅像ハ當國ノ國領寺ニ安置スルノ儀

大勸進念阿彌陀佛明蓮大士藤原助近  
 右志者過去二親并修行嚴□新發意乃至  
 法界衆生平等利益奉鑄一丈二尺佛身  
 也  
 建長五年癸丑二月十八日丙寅彼岸初日

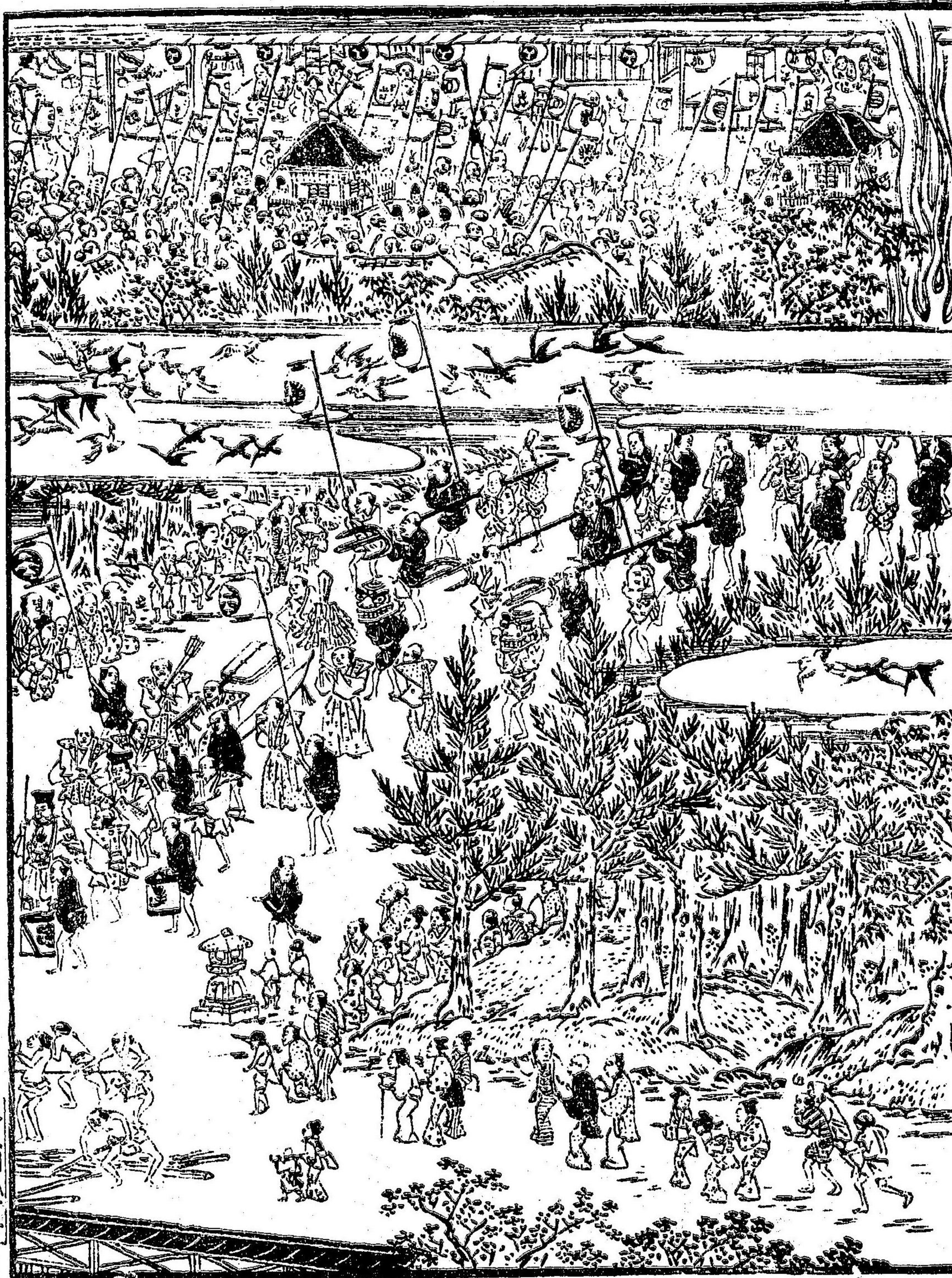
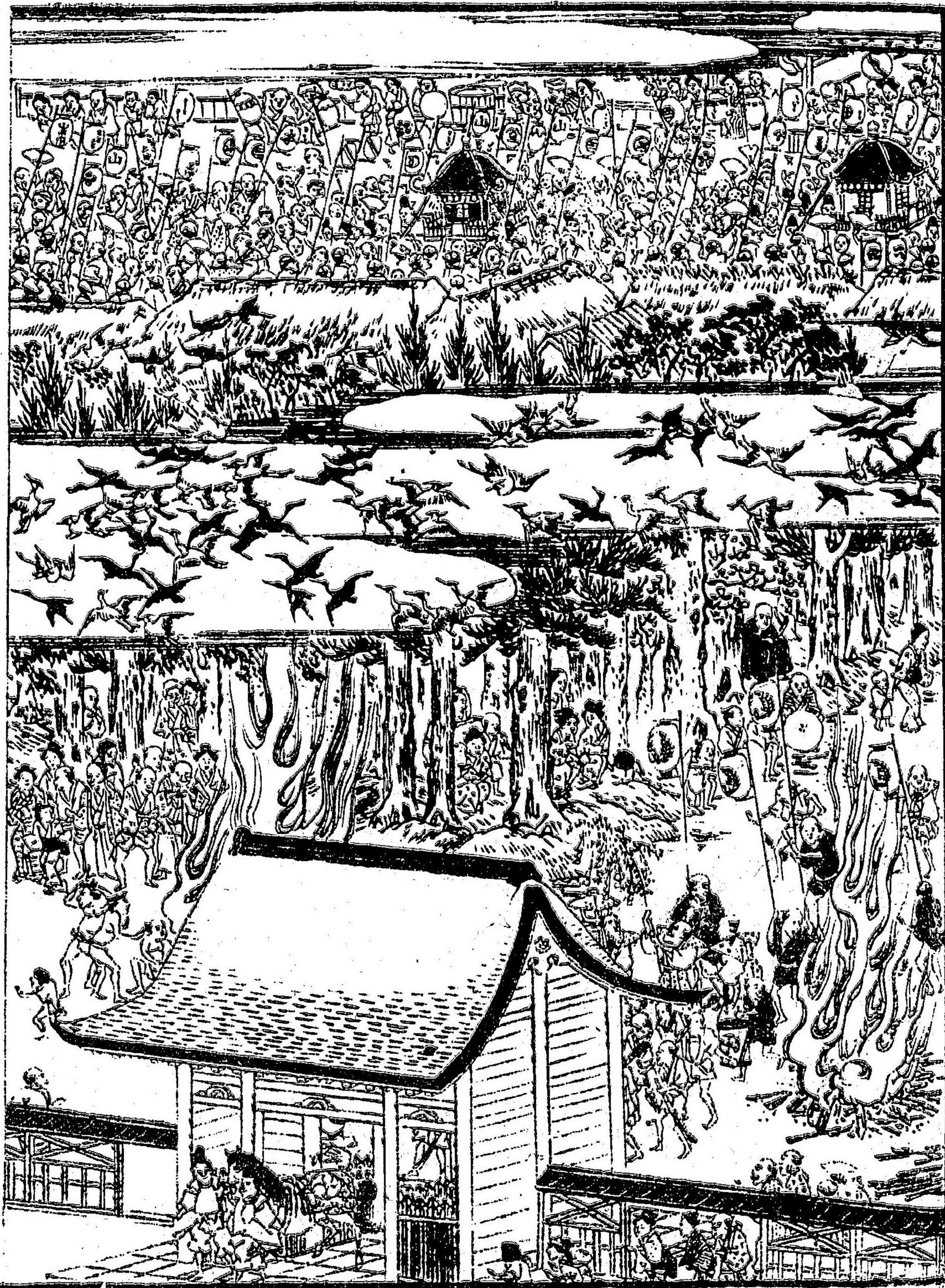
護摩堂 司並あり不動尊の像と御供所 本社の前

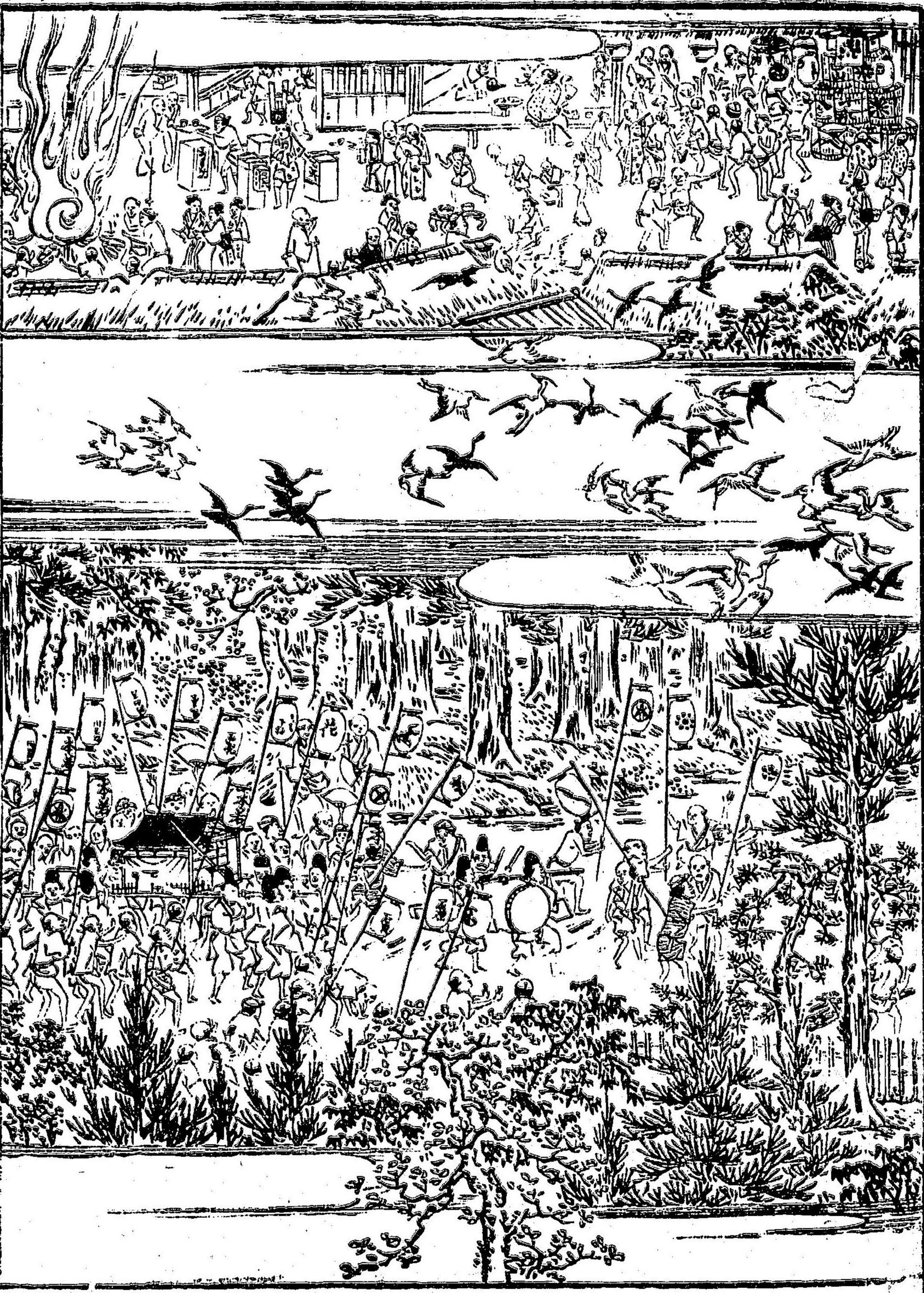
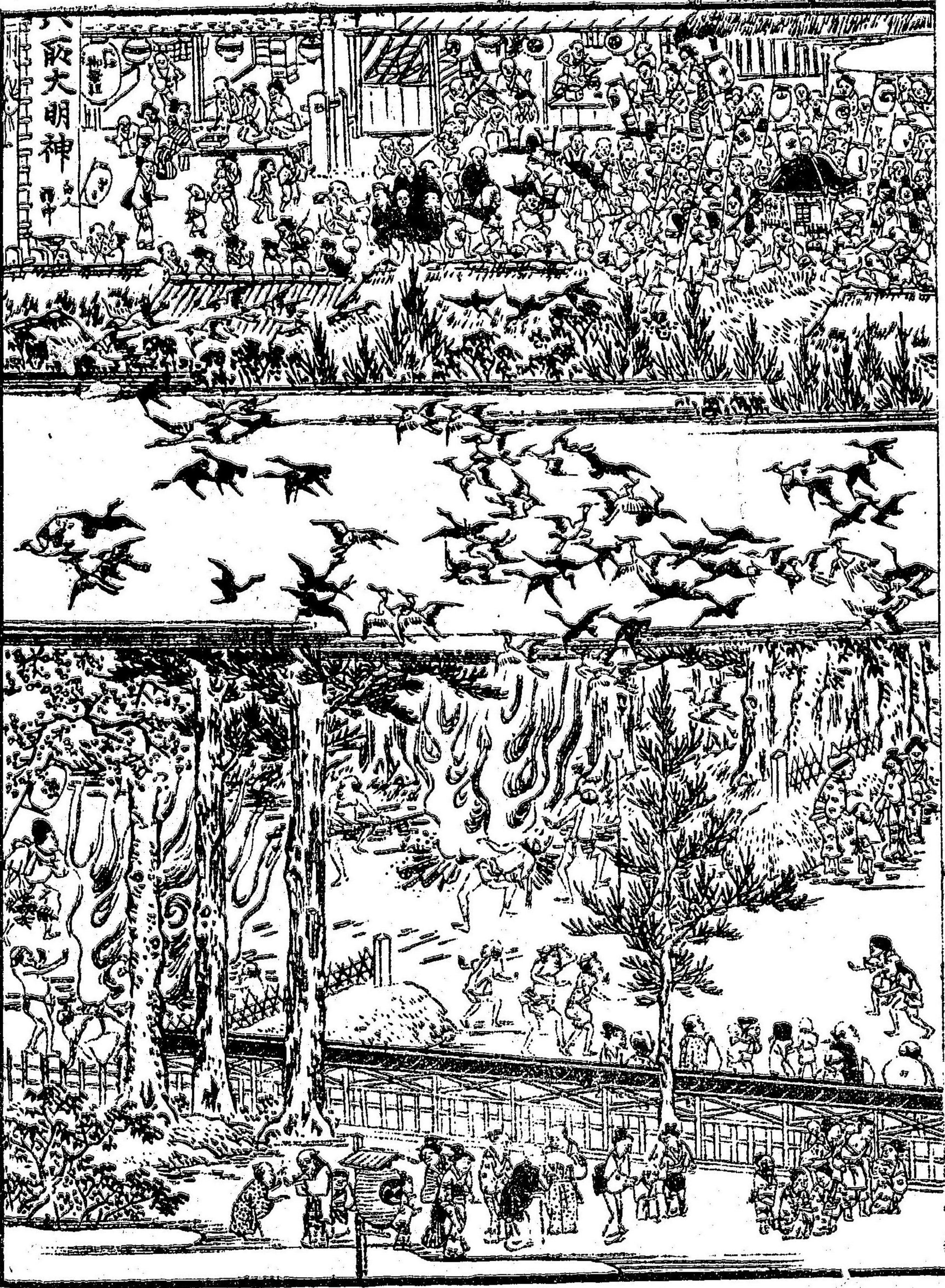
東照大権現宮 本社右の安座を元和注連樹 本社右の安座を元和注連樹  
 四年戊午寺創建と云ふ 社右の安座を元和注連樹 社右の安座を元和注連樹





旧例なり 此家ハ大已貴命出現の時宿を求めし... 神事 同六日 修徳の祠後百歩ありて... 天下泰平神事 六月廿日 修徳の祠... 小祭 七月七日 修徳の祠... 天下泰平神事 七月十日 修徳の祠... 田面神事 八月朔日 修徳の祠... 社記曰 景行天皇の四十一年 辛亥五月五日 大已貴命 此小野縣に



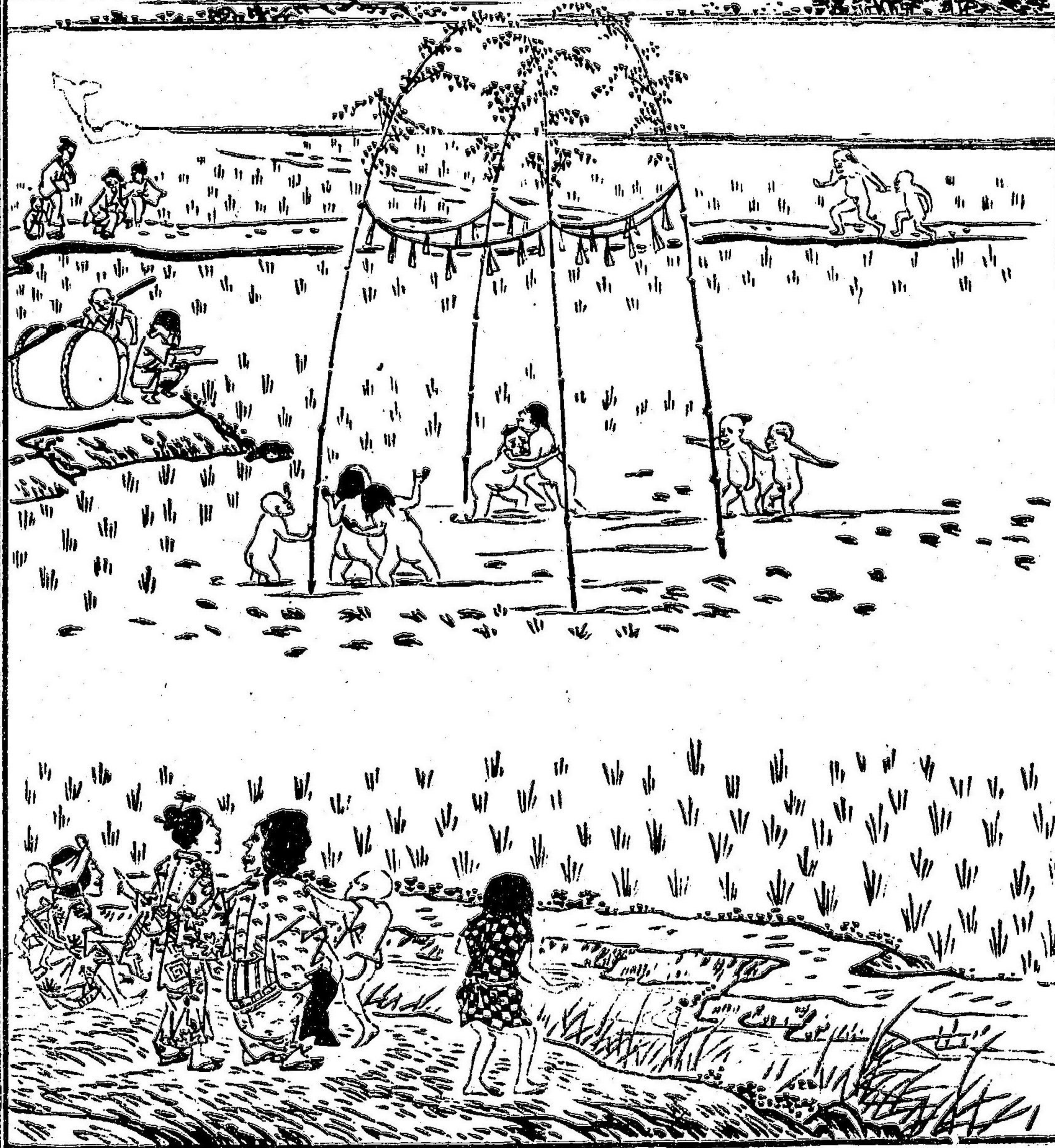




六所宮  
田植

五月六日、伊弉諾  
の神、武蔵國の  
人民、早苗を  
携へ来り、神田  
是を挿り、神童  
白鷺の形の送り  
物、蓋鉾と  
けとん、さし乃  
傘と、曳ハ又  
と、曳ハ又  
と、曳ハ又

一田の中、下りて  
早苗を、  
有、  
中、  
花、  
光



出現神託ありあり祠を經營し里人崇敬し  
延喜式大社止乃豆と風土記大社止乃知とす知と豆の通音なり又大社の後  
麻止と以て於保麻止と一或ハ布止麻止多麻止なりとあり  
成務天皇五年乙亥兄多毛比命と一此地小國造と一  
天德日命の孫出雲臣祖名三井 因る茲小府を開き  
宇迦諾忍之神救命十世の孫なり 中々府中の祭あり  
又大巳貴命ハ此地出現の靈神あれハ是を崇とす祖神なるを以  
素盞鳴尊と合祭し 兄多毛比命ハ出雲の臣の裔なりと以て  
相殿小伊弉册尊瓊々杵大宮女命布留大神等の四神を配  
祀し新小此地小宮祠を經營ありと圭田を附し以て國社と  
此を稱しと六所宮大麻止乃知天神と云又天下春命 倉指魂大神 以上三  
瀬織津比咩 倉指魂大神 倉指魂大神 以上三  
神を六所宮の相殿小座座なりと客來三所と稱し是を  
祭る小國社の禮と以す爾來大麻止乃知天神小野神社二社合  
祀の社とありあり 安閑天皇乙卯年小至りハ春冬

二時の祭祀を行く由旧史ふり然小星霜を歴て康平  
五年小至り源賴義義家兩公奥州安倍貞任宗任一族征伐  
發向の時當社小請多ハ軍の勝利を祈願あり夷賊平治  
凱歌の時報賽と一華表の内左右両辺小槻教株を種  
めて以成功を謝し 治兼四年右大將賴朝公當社  
詣て請禱し大ニ戦勝の功ありと文治年間宮社を再興し又  
壽永年間継嗣を求め賴家公を徵く葛西三郎清重哉  
一々神器を献せむ 寛喜四年中武藏左衛門尉資賴を命せり  
所の祭祀今小連綿として廢せり後足利家小至り近世此  
將軍家相繼て崇敬衰へす就中河入國小建む 御當家より  
多信ありハ社領五百石を附し御祈禱のを命せり岡原  
大坂の両役中當社の神主猿渡左衛門佐盛道と一御勝  
利の祈禱と修せりハ御感状御直書を給へ後二代

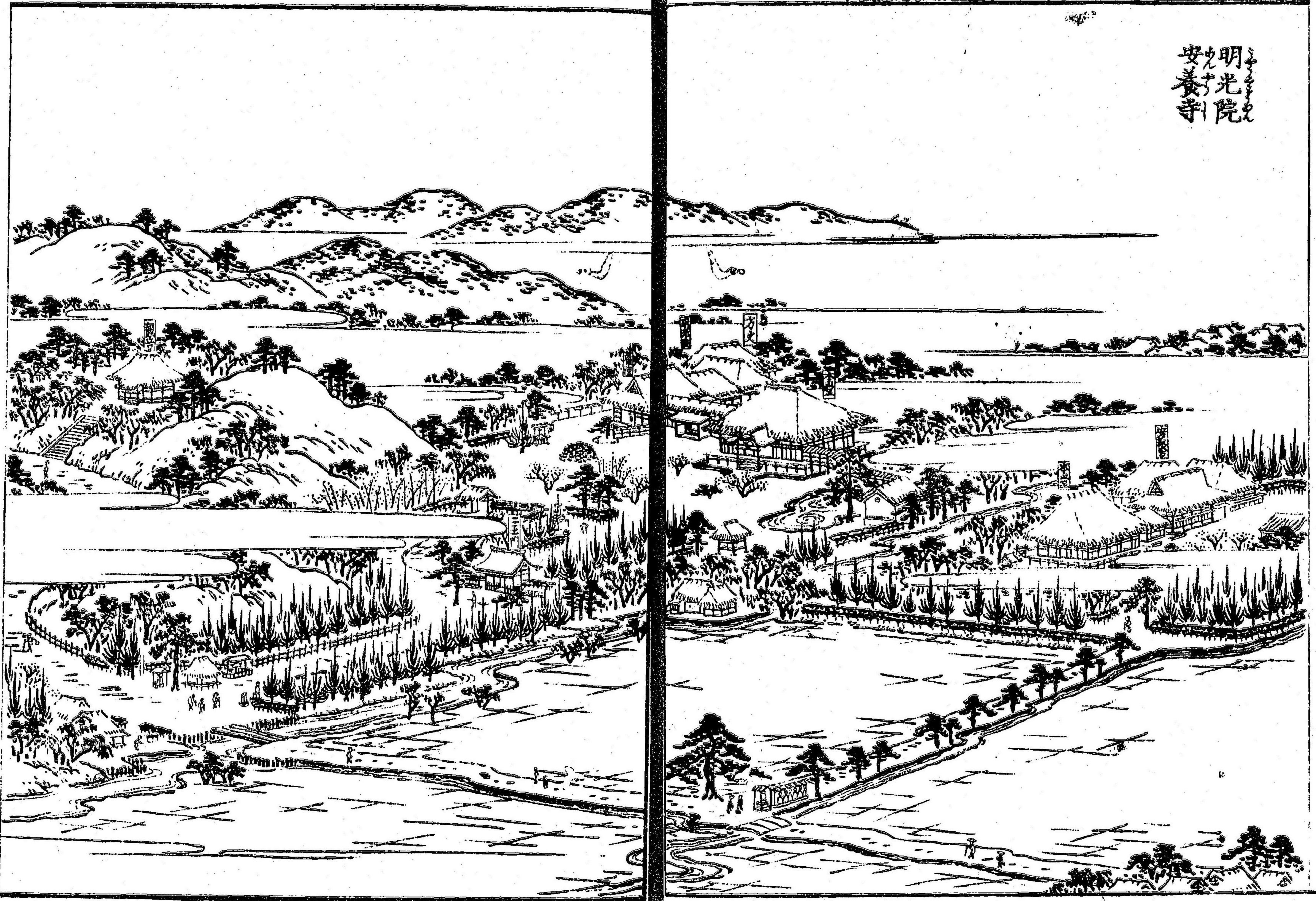
將軍家よりと又御書判の御直書を給ふ殊に御在國の  
徳社々々を以て慶長年間石見守大久保氏某を以て神  
殿を新中一國家の祀典に列せしむ且命を下し馬市此  
法則を定給ふ正保三年府中本町より火出て當社神  
領の地に至る迄皆悉く焼亡を依て寛文七年丁未大和守益  
廣之侯としく造營使と多し宮社御再建ありしあり  
寛永元年社記云神主藤原盛正天正年間北条陸奥守  
氏照の爲ハモ子の城は蓋此城没落の時盛道とて歿死せ又此怨火の災不  
かりと當社悉く灰燼せり故に頃世に將軍家の澄状或ハ秘藏の神室等  
六所宮御旅所 六所明神より一丁半とあり西の方府中番場宿の  
中程相模街道への岐道札の辻の傍より毎歲五月五日大祭此  
辰夜六所宮の神輿をあるはせしむ其式ハ前の条下  
詳なり

御田 六所の宮の後の小徑を過る百歩とありあり豁然とる稻

田より東ハ悠遠中々眺望分明なる南ハ多磨川の流を隔  
て長岡の上ハ松の立もをえ世ハ所謂向ハ岡足あり此  
地北ハ府中の驛舎中々六所の林叢鬱然とあり 御田植の神良  
六所宮年中行事の 下ハ詳なり

本覚山妙光院 真如寺と号し府中本町の南の小路より新義の真  
言宗中々花洛仁和寺の御門跡に屬せ 清和天皇の御宇  
貞觀紀元の年真如法親王の御願より慈愍僧正創  
建あり佛刹より行基大士彫造の地藏菩薩とあり  
長五寸 若干の田園を附せ然も當寺度々の兵燹に罹り大  
荒廢なり一と永享十一年己未法印宥源 長祿三年己卯  
再建し當寺中興の閑山とあり 天正十九年辛卯御當家本堂  
家帯の額真如寺の三大字ハ勝仙院僧正日光の筆同一向拜  
也掲る本覚山の額ハ南山の妙門乘鎮の書裏門本覚山の額ハ

光明院  
安養寺



天壽の筆書院無為心の額ハ佐々木玄龍の書かりを觀音堂ハ  
門の入口左の山比上よあり大悲殿の額ハ僧禪大僧正覺眼筆と云  
木尊十一面觀音の像ハ長二尺五寸ありて聖德太子の作といふ  
當寺什宝ハ北条氏照の書簡二通を藏し其餘は鷹爪画  
幅ハ御筆の物なりと牡丹唐草ハ扇を縫物ハ五條の袈裟  
と共に御當家より拾ふと云ふなりと云ふ

古磬一故 單物なりて銅色變まじ墨ハ

日光山安養寺 妙光院の南の小路を隔て同し並びあり 此地の山

崎と天台宗上州世良田の長樂寺ハ屬と本寺阿彌陀如来を  
座像一尺六寸ありあり作者詳かハ永仁年間海人中興

開山より近き年地魚の災ハ罹りて日記を亡しと云ふ

武蔵國造兄武日命殿館跡 妙光院の前ハ岡と云ハ古國造居館

の地なり 御入國の後此跡ハ省耕の御殿と建せられたり

大樹屢々入りせられし保三年丙戌十月十二日府中

本町より出火して此御殿焼亡せり 其後ハ御再興もあり享保

年間里民の乞ふ任せ陸田と名し下さしあり 故ふ土人ハ御殿地

と稱せり此所の眺望を勝と云ふ

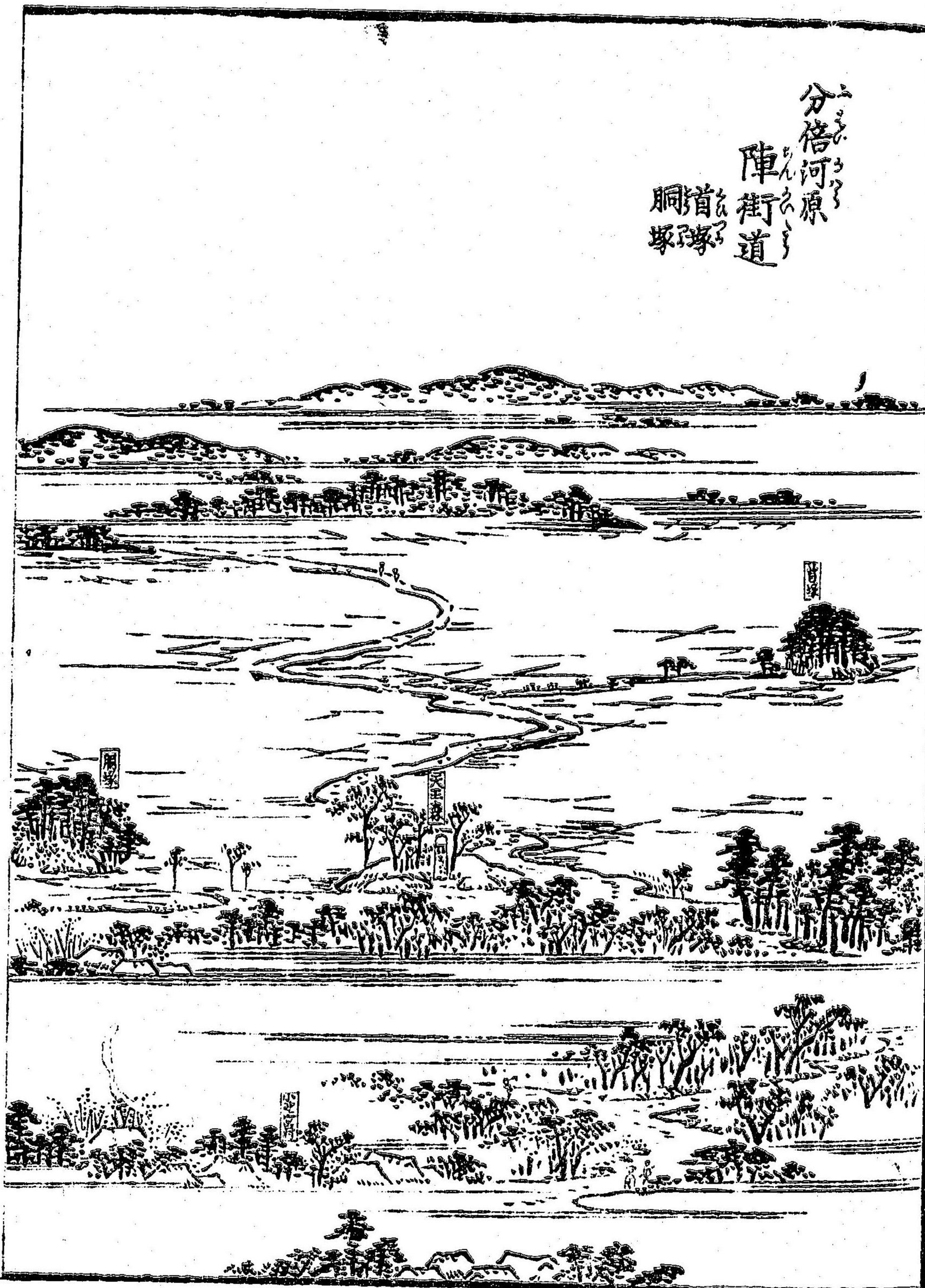
按ハ國造ハ神武天皇都を大倭國橿原に定めて天皇の位に即ちた時葛城  
國の造を定め其餘功ある者ハ國造と賜ひ又縣主と定めありしなり  
代ハ任せしめし和銅の比を總持の國造百四十餘あり皇朝上世百四十  
四箇國中ハ國造一人たりし神祇祭祀を掌りしハ民事を治  
仁德帝の御宇ハ遠江國司又崇峻帝の御宇ハ河内國司とあり聖德太子の  
憲法ハ國司國造の二ありて天武天皇の御宇ハ國司國造郡司ハ百姓等とあり後又國  
司を置りて國司ハ國造より位高く權重を殊ハ國司國造と次第して稱せられしハ  
これより後世の國史中ハ往々國司國造の二を載られしとありの世ハ國造を罷ん  
て國司とありしハ一ハ廢せしめしなり

是政村 府中の南多磨川の北の岸頭あり此地の里正ハ井田氏の人あり

其家系を按ふ祖先ハ畠山庄司重忠の四男井田四郎重政の末葉なり

小田原北条家の臣井田操津守是政の子孫なりと云天正十八年小田原

没落の頃ハ王子の城敗れしより後此地ハ住を依て是政村の名あり



分倍河原  
陣街道  
洞塚

悲願山善明寺 圓養院と号し府中本町より關戸へ行道の右側あり

相模街道より天台律院より常明院より屬志本寺より阿弥

陀如来の像を安す坐像一丈六尺あり

久く中古寺院荒廢して記録と失せ然る近來編無為解脱居士

俗稱依田伊織 當寺と再興あり證海上人と中興潤山と田園

等を寄附せり故に居士の肖像あり

毗尼藏とあり准后公遵法親王の志を以て解脱居士の墓を

堂後ありと彼岸山文庫ハ本堂の右ありと庫中収蔵せしむ此

書籍ハ解脱居士の著書中てまゝ百三十三箱あり

津保宮 同所四丁より西南の方下河原農民の地ありと當社ハ國造

の靈社なりといふ今焼く茅祠を存せしものと毎歲五月五日六所

宮大祭の爲ハ當社より六所宮へ奉幣夜を立るる旧式中より則六所

宮の神官馬に乗し是と勤む

源氏物語桐葉卷の... 元年中... 分倍河原 同所の南代小川を隔る耕田を以て

戦ありし地中を時討死せし人の墓あり

亨徳四年の春も濃倉成氏上杉房頭なるひ小持朝と此地を

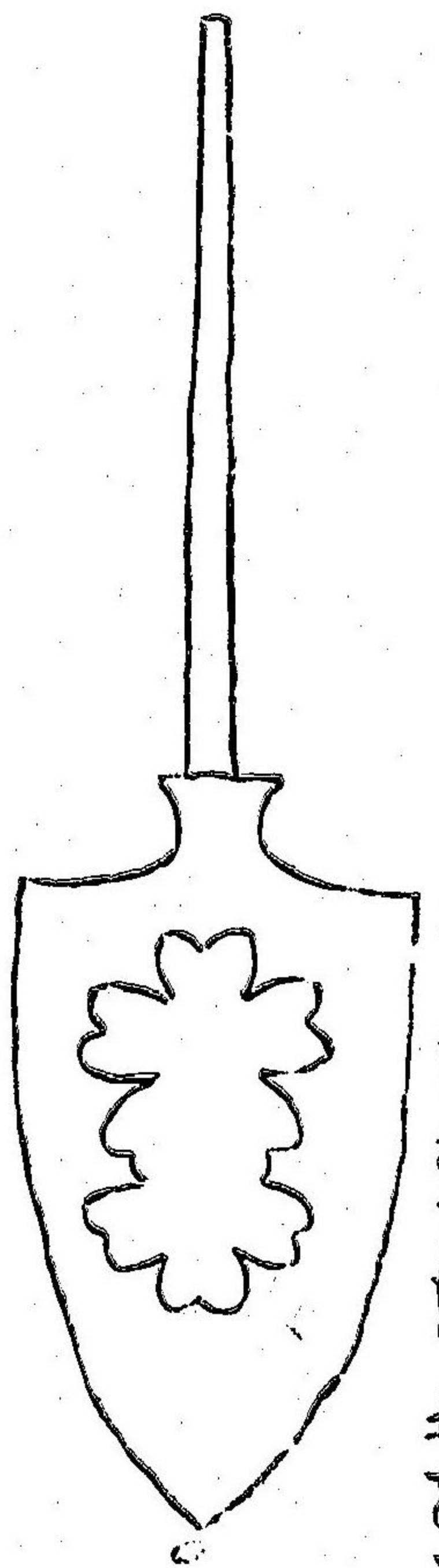
争戦し大上杉勢敗北也又亨禄三年の夏北条氏康向岡の小澤

の原小屯上杉朝貞多磨川を前におく陣を置る西軍府中の驛

を相戦ふ此上の合戦は太平記濃倉大寺 此餘も度々血戦ありし地中を夫々今

遇此所の田間を穿て兵器をばらめり

大寺圖の如く 様の花は 透しなり



三千人塚

六所宮より南の方十五六町計を隔る道端ありあり三尺半あり

代小川

府中の南と流る西の方二里ありを隔る青柳村より多麻

陣街道

小野宮と分倍との間の耕田の地中を府中本町より関戸へ

道中

鎌倉より北國東國へ軍勢を向らう頃の通路なり

いふゆゑをあるす

注されし... 慶長年間... 六所宮へ寄る... 書の中... 六所宮川... 濃倉... 小野宮... 分倍河原... 耕田... 陣街道... 鎌倉... 北國東國... 軍勢... 向らう... 頃... 通路...

道中鎌倉より北國東國へ軍勢を向らう頃の通路なり



小野神社

かみかく称せり

小野宮村陣街道を隔て分倍より良小當り地とあり

小野宮村の古郡村定らるる時より号あり

小野縣と稱せり今ハ府中の舊名とあり

抄小多磨郡小野平乃とあり

北河間の家ハ中古の甲州街道府中より

古街道と唱ふ

小野神社舊址 小野宮村陣街道の右あり今小野小叢祠を存せり

武藏國風上記曰多磨郡小川郷

小野神社織津比咩也

所祭天皇三年甲午始行祭禮有神戸巫戸等云云

喜式神名帳曰多磨郡八座

小野神社云云

三代實錄光孝天皇紀

野元慶八年七月十五日 癸酉授武藏國從五位上小



社記云當社祭神上古ノ瀬城比咩一座なり一宮下春命と  
 遷座なり又倉稻魂命と配祀一々小野神社と三神となす  
 らせし其時世より最舊社なるを以て 成務天皇五年  
 乙亥の秋諸國ノ令一々國郡ノ造長を置り時兄多毛比命も  
 詔を以り當國の國造とて此地に至り小野縣ノ府を闢るを以  
 一より後崇敬厚く再び當社の御神を六所宮の相殿に遷し  
 らせらるるなり  
 六所宮ノ客來三所と稱するもの即是なり下春命を  
 六所宮に祀り客來三所の内 ありあり一より僅に茅祠一宇を存し  
 其舊址を標するのこもりとて實に千載の古と想像す  
 樽枯樹 社の後より今も樹根を存するの周圍計其根上百人を座  
 神道 多麻川の南一宮より此地小野神社へ通る田畝の徑路と云  
 古一宮御神より小野へ遷幸の時の旧路とて中古迄一宮の祠官  
 此路を經て小野社に至り然して後六所宮へ來り一より其項二宮

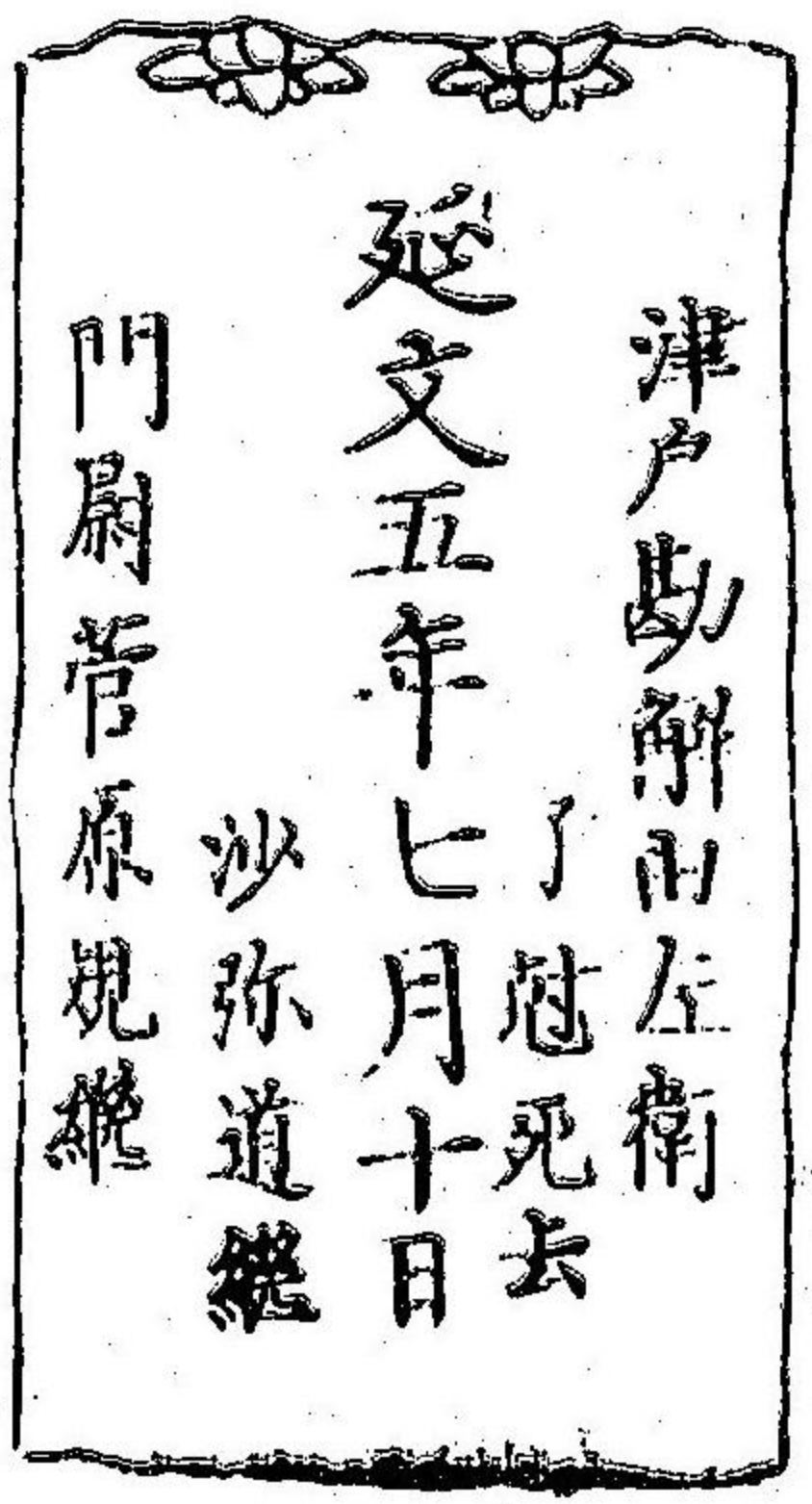
より空輿を昇來れり小野宮邑の里民舉て多麻川の岸頭  
 まして送るに迎せし一宮祠官の碑も存す  
 小野牧 今ノ所ハ府中の北國分寺の邊より小川砂川の間の農  
 田となり地其牧の舊跡なりと云傳入  
 名ノ茶下 往古當國の國造年々八月に至り此地ゆく駒を撰て  
 鳳闕ノ齋一々公事報元ハ八月廿日武藏國小野御馬  
 四十足を以て  
 拾芥抄曰 年中行事部 小野御馬云々  
 又 八月廿日 武藏 小野 御馬 云々  
 又 同書 比 牧 名 立 野 式 白 小 野 秩 父 己 上 武 藏  
 延 喜 式 武 藏 國 小 野 御 馬 云 々  
 御 牧 武 藏 國 小 野 御 馬 云 々  
 石 川 牧 武 藏 國 小 野 御 馬 云 々  
 右 諸 牧 武 藏 國 小 野 御 馬 云 々  
 等 諸 牧 武 藏 國 小 野 御 馬 云 々  
 齒 四 武 藏 國 小 野 御 馬 云 々  
 上 若 武 藏 國 小 野 御 馬 云 々  
 又 同 書 武 藏 國 小 野 御 馬 云 々



史ありと際さあひしを名ありしと云ふなく澄とてさるなりけしと  
 観音堂 表門を以て西面あり持多西観音ハ木佛立像七尺あり左右  
 六観音の像ハ何れも四尺五六寸あり作者詳ならず  
 當寺ハ足利家の再興より永徳元年鎌倉左兵衛督氏満小山  
 義政退治としく發向ありし頃も當寺ハ陣座を備けり又應永  
 六年ハ左兵衛督滿兼周防の大内助義弘ヲ京都ハ於て逆心を  
 起せし時同十月廿一日京都の合としく當寺ハ動座なりぬ  
 同三十年癸卯春も又常陸國の住人小栗孫五郎平滿重ヲ謀反  
 あり鎌倉より持氏公結城へ發向同年八月小栗落城の後同十六日  
 當寺ハ帰座同三十一年十月廿三日當寺炎上ありしハ同十月  
 十四日持氏公鎌倉へ還御ありし當寺ハ鎌倉大草紙に云え  
 たり 當寺什室の中は往古當氏公陣中にて用ひられしと云古き洞瀧一口あり  
 石上山弥勒寺 般若院と号し高安寺より六町あり西の方同一  
 街道の右側あり真言宗中々府中の妙光院ハ属を開創此

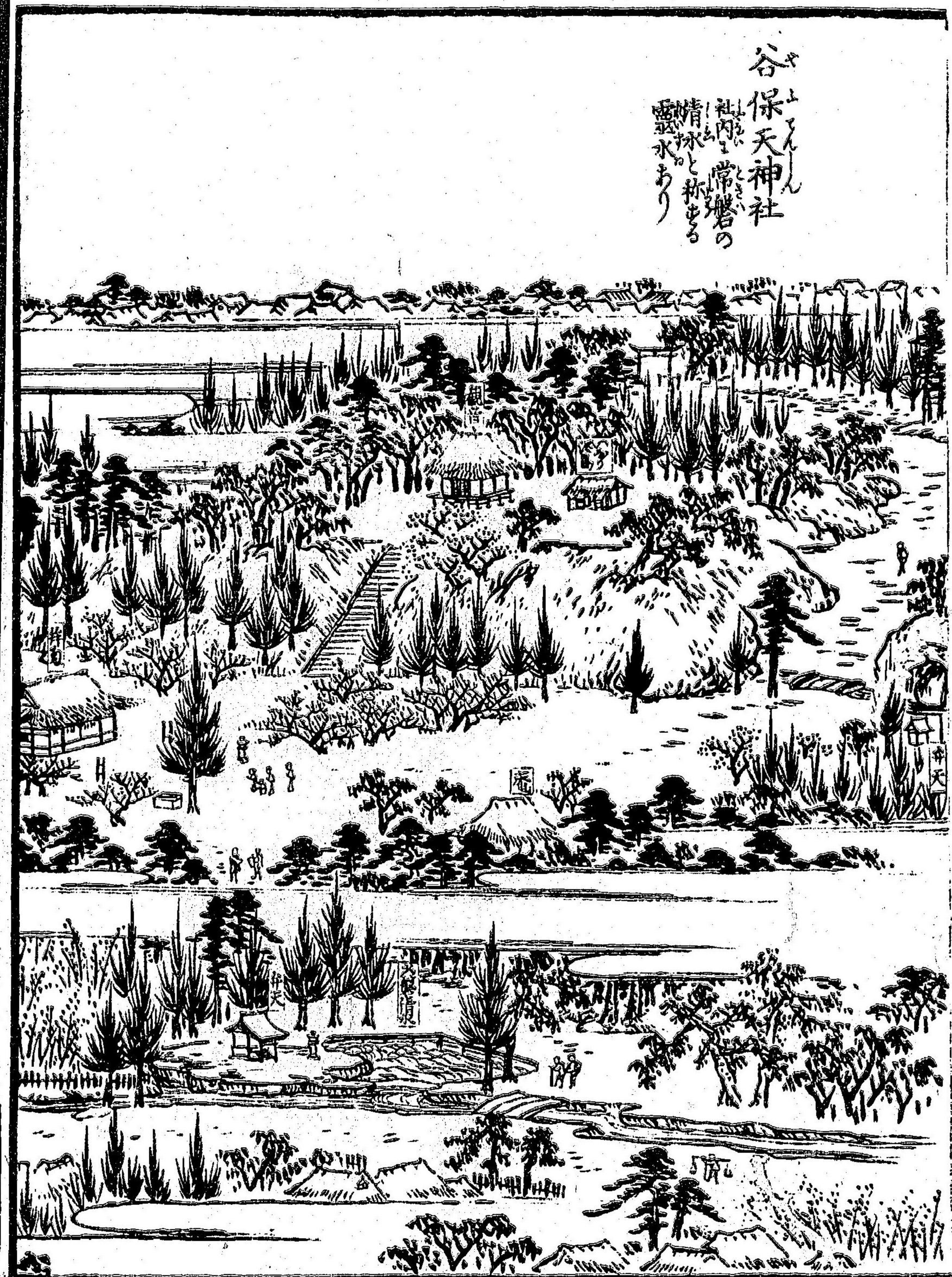
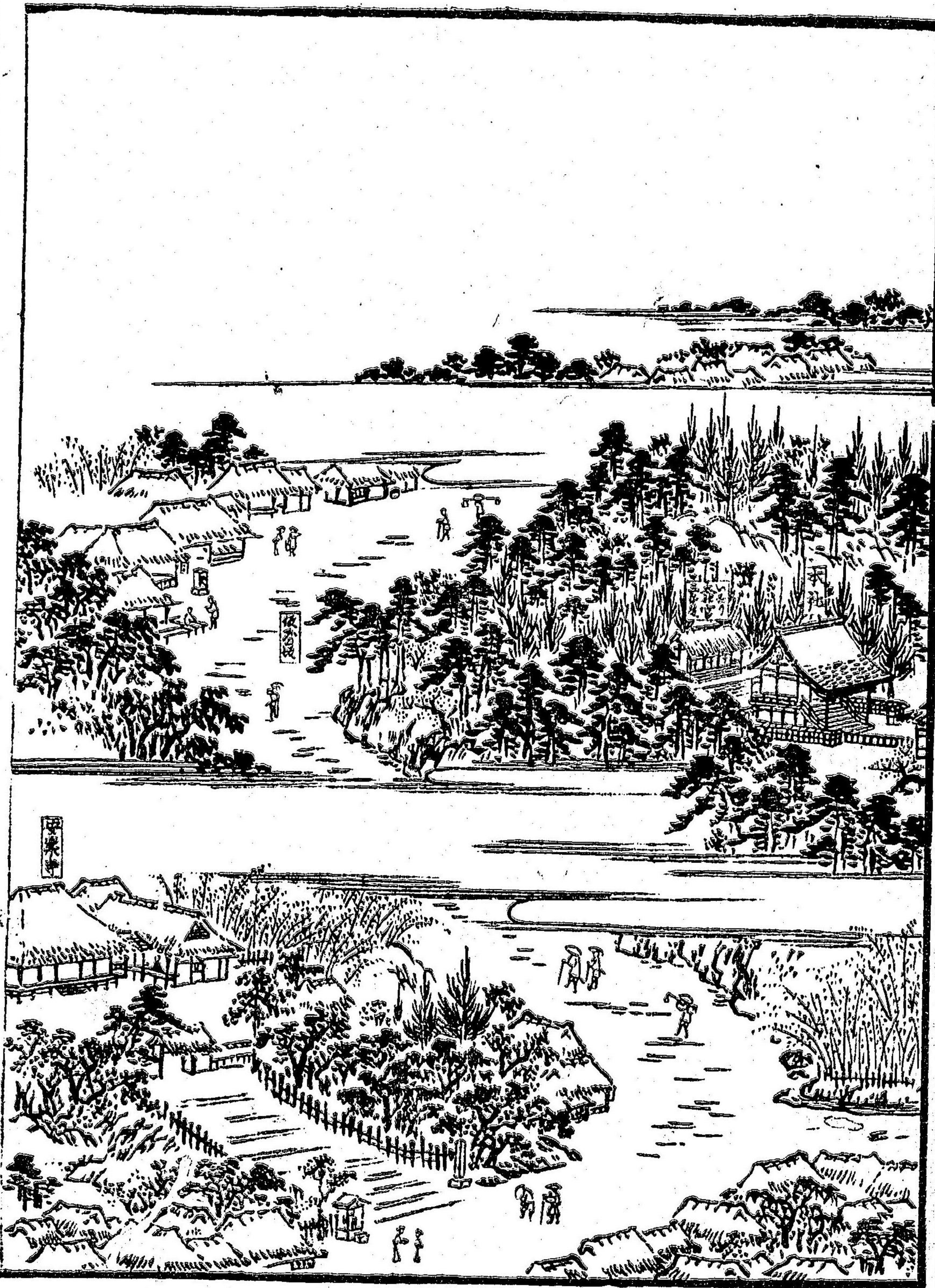
始久しく今もあはれ永正二年乙丑權大僧都法印良孝  
 中興を本誓大日如来ハ一尺斗の座像なりとて作者未詳當寺ハ  
 津戸助解由左衛門尉菅原規繼墓あり

墓碑如圖



按此助解由左衛門規繼ハ津戸三郎為守の氏族なり為守の墓ハ五  
 子の觀池山大觀寺あり今ハ幡宿の農氏ハ右衛門とてさるあり津戸氏  
 中興を本誓大日如来ハ一尺斗の座像なりとて作者未詳當寺ハ  
 津戸助解由左衛門尉菅原規繼墓あり

谷保天神社 同ハ街道西の方谷保村道より左側あり  
 別當ハ安樂寺と号し祭礼ハ毎歲二月と八月の廿五日又三月十五日  
 小八間倉あり十一月三日ハ當社往古天神鳥と稱する地より  
 地ハ遷座なりしと云ふ縁あり此日ハ小菜供と献備事とあり  
 本社祭神天満大自在天神一座神祇ハ菅家第三嗣菅原道武



清水立場

甲州街道の立場  
 一、此地にてかこ  
 清泉涌出せり  
 清水村の稱ありと  
 云此地は酒舗あり  
 て店前清泉沸  
 流せ夏は涼  
 を湛せと行合衆  
 應せり故此地  
 往来の人こふ  
 憩ひて避暑  
 と遊ばる



朝臣の手刺なり

額 天満宮 後宇多天皇勅世尊寺經朝卿筆  
 額の裏に左のよきの二十四字を刻せり又外は同額  
 光園卿の書を納めり裏書は元禄三年庚午骨毛軒河越門  
 經朝卿の筆せり額の背面は曰

建治元年己亥六月廿六日乙丑書之

正三位藤原朝臣經朝

常盤清水

裏門出口道の端に池あり中島あり財天を安置せ清泉湧出  
 紫の僧某當社へ詣り項和奇を詠せり常盤の清水と稱せり  
 本地堂 本社の右の岡あり本堂十面あり道武朝臣靈社あり  
 社と稱す 鱧音の像ハ慈覺大師の作と云

社傳云昌泰四年菅公筑前の太宰府へ左遷の時卿三男菅原

道武朝臣も又此地の流をせせめひ三年の星霜を経ぬ

延喜三年二月二十五日父君菅公筑紫あぐ亡むひぬとて悲歎の

あり配所の徒然ハ父君の御像を手親摸刻しあひ且暮在り

如く事へ孝道の誠を尽さざりしを後より一社を奉りし事あり  
昔ハ大社也僧房も幾かりあり櫻木坊邑盛坊尊住坊梅本  
坊松本坊滝の坊以上六坊中古遊も猶殘りあり夫々奉れ  
今ハ滝の坊と引替る一宇天曆ふ至りてハ村上帝狛犬一雙を寄附  
のと存せり是古の滝の坊なり又大般若經四卷を収む源義経朝臣此  
あふ今猶存せり甚の古物なりと云伊勢三郎龜井六郎及ひ辰慶等の  
奉納なりと云四人書寫せり経巻なりと云

菅原道武朝臣舊館地 同所二丁許南よりあり空堀城門の跡と覺し  
その所もなほ四方二町あまり此封境なり土人三郎殿屋敷跡と稱  
す相傳山三郎道武此地小住一當地の縣主上平太貞盛の女を姫と  
一子を得たり其子を菅原道英と号夫より六世の孫を津戸三郎  
為守と号すと津戸為守の御代安永の年此の地を或云此地ハ貞盛舊館の地なり  
道武主貞盛の御代に嫁りしるの御代に未だ未だ

假家坂 同所安樂寺の門前百歩計街道の西の方へ向ひく上坂を  
云建治二年奉幣使此谷保天神の宮へ下向し多し頃假小旅

館を假け一旧跡なる故に此号ありと云

梅香山安樂寺 松壽西院と号も天神社より一町半あまり西北の方

街道より右側ありと天台宗中へ東叡山に属せり當寺も

天満宮の別當寺ゆく天曆年間法圓大僧正開創せりと云

中興ハ津戸三郎為守も願なり本も阿弥陀如来ハ法然上人の

作ゆく座像一尺五寸計あり佛鉢の中は為守注する所の血文を

収むると云其余什宝は為守の太刀一振同画像一幅同甲冑の

中ハ籠りと云薬師佛あり傳教大師の作と云像材ハ沈香小

一七十二神將の像迄悉く高サ一寸半比厨子の内は造り籠られ

津戸三郎為守の墓ハ八王子の市中觀地山大善寺との十八檀林に

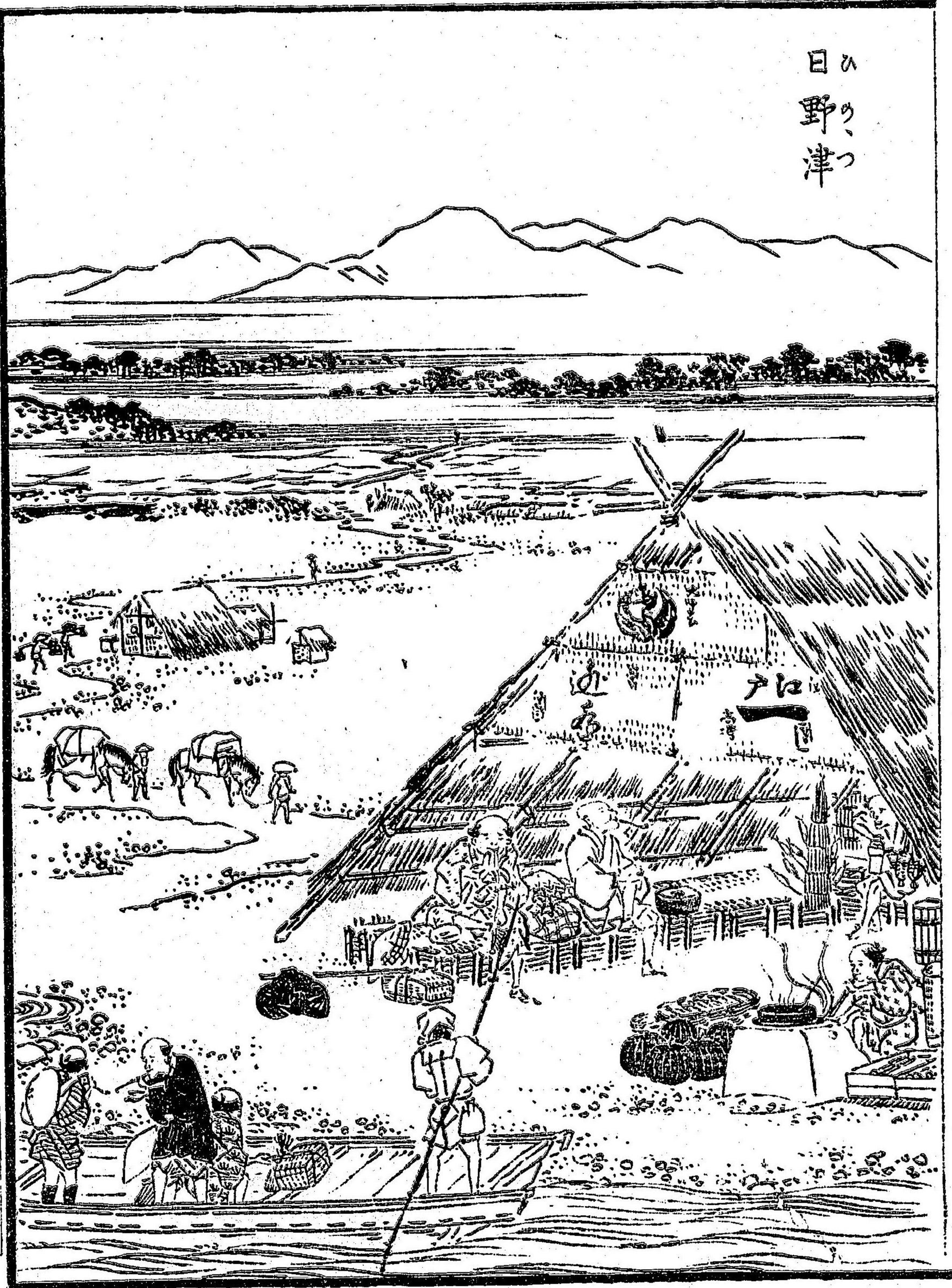
順譽とつる者造立せしむる石碑なり又為守の生母ハ後裔津戸六郎右衛門法名

順譽とつる者造立せしむる石碑なり又為守の生母ハ後裔津戸六郎右衛門法名

國の總追捕使秩父権守平重經の嫡子孫傳教大師の御代に相續せり津戸三郎

馳参し朝公の旗下は屬し度々軍小忠を顯し名をあげしと云

日野津



建久六年二月南都東大寺供養の為將軍上洛の御ありし時  
供養の御ありし時同三月洛下入同三月十日法然上人の麓に参り念佛往生の道と兼りて  
法名を授けし御ありし時同三月十日法然上人の麓に参り念佛往生の道と兼りて  
同三月十日法然上人の麓に参り念佛往生の道と兼りて  
切五臓六腑を取ぎし御ありし時同三月十日法然上人の麓に参り念佛往生の道と兼りて  
なりし御ありし時同三月十日法然上人の麓に参り念佛往生の道と兼りて  
二月十三日の夜夢に來りし御ありし時同三月十日法然上人の麓に参り念佛往生の道と兼りて  
高僧の御ありし時同三月十日法然上人の麓に参り念佛往生の道と兼りて  
衆を断りし御ありし時同三月十日法然上人の麓に参り念佛往生の道と兼りて  
玄武山普濟禪寺 日野渡口より此方の岸頭を右へ十丁半入る芝崎

村と云よあり 各なり今ハ小名と名なり 濟家の禪林や相州鎌倉の  
建長寺に屬せり 開山ハ真照大定禪師物外可什和尚と号す 頃  
二年癸卯十二月八日寂す 本寺ハ正觀世音座像二尺半あり 左右に  
十六阿羅漢十大弟子等の木像を安んじ共ニ作者詳ならず 中  
興大檀那ハ立川宮内大輔と稱す 法名ハ宝山道貴大禪定門と



芝山寺  
普濟寺  
寛文六年  
所の六面  
石塔と存  
乃



靈牌の當寺はありて  
其墳墓の所在をあるも  
佛殿惣門の内ありて  
釈尊の座像三尺ありて  
服士  
文殊普賢二尺斗共小作者をあるす  
其記は平重能平義親  
平高親等の名を記せりと  
五十嵐市左衛門感状曰

景虎浄出陣す初三田彈正忠政定先陣而大幡  
陣所八王子城至北条氏照と及一戦没為す所五十  
嵐市左衛門竹田新八郎ト云武士ヲ討之ニ番着到  
賞功不跡時芝崎三十貫文所ヲ被仰下者也  
依る如件

永禄三庚申年三月七日

立川宮内重能在判

開山大定禪師真像座下之記曰  
彩色落端造立助縁芳衛辨翁啓宗來啓一宗華

宗義啓端宗順啓勝宗範啓壽壽性了宗宗快翁  
塗師行盛佛師上總法橋朝宗幹縁比丘啓遠  
應安三年戊子二月三日敬記

當寺境内北の方ハ往古立川宮内大輔某の宅地たりと云  
數年合戦の地ゆへ今猶林中の首塚と稱するものありハ  
と云 今も皇の跡と覺れ地存し山中折とて夫の根の類の武器を  
ありとて又慶長の頃並川義賢などといふ人ありと云宮内大輔  
一族も其 豊太閤の朱章あるを以て當寺天叟宗祐和尚  
御開國の砌寺領を乞奉り朱璽をもち又宮内大輔為討伐  
佛閣を放火なり多し静謐の後ハ修理せしむとある證據を  
平後住持覺宗理 弟子の 平事を愁訴せしめ先御加増あり  
旨被仰下とのとも運ぶるが先栄和尚改衣の爲し京か  
途中迂化せり平後久しく無住の寺となり朱章を欠と云然る  
寛永の末住持大年といふ僧當寺に住せし故ありて廣福寺  
といふ退去せしと什宝の古文書古器の類を悉く持去れと

と云く今ハ寺の朱章を傳へ存せしもの

日本年代配合鈔曰  
永正元年甲子九月廿五日立河原於山内顯定扇  
谷上杉朝義合戦朝義軍敗太田下野守為始多兵

南朝紀傳康正元年己亥正月廿日鎌倉成氏と房頭八定政上杉長尾景中と  
武州立川原や合戦云

小田原記云永正元年甲子九月廿七日駿河の今川氏輝并小田原の松田左衛門賴重を  
加り多れハ此勢を合せ扇谷の五郎頼良大將軍と武州立河原陣營  
布山内の管領上杉民部大輔可濃入道并當屋形憲房東八州の軍兵を  
備へ押寄たりやう夜ふ入るハ山内の加賀と越後の軍勢をせむれハ  
朝良あうふあかけとらうと河越の城は落延梅酸の湯ををむ

六面塔 塔の中あり高さ六尺をかり一片の幅一尺五寸あまりり  
六面の石ハ一片ハ蓋石と臺石とを穿ちて立合せしものなり  
前面の二枚ハ金剛密迹の二王を彫刻し後面左右の四枚ハ四天王の像を刻  
せり上の方ハ何れも宝冠の冠を戴てあり常の石工の色ハ出  
のあらず極めく妙作なり增長天の一片ハ報号等を刻せり妙左の

延文六年辛丑七月六日

施財性了立  
道圓判

按前ハ奉安の南山大定神師肖像座下の記文ハ性了の各あり六面  
塔の財主性了一なり延文六年ハ康安と改元の年の應安三年に至り  
まうく十年なり然れハ此人なり

普濟寺境内六角古碑

高廿五尺寸 巾一尺四寸計

那羅延堅固



密迹金剛



增長天王



多聞天王



持國天王

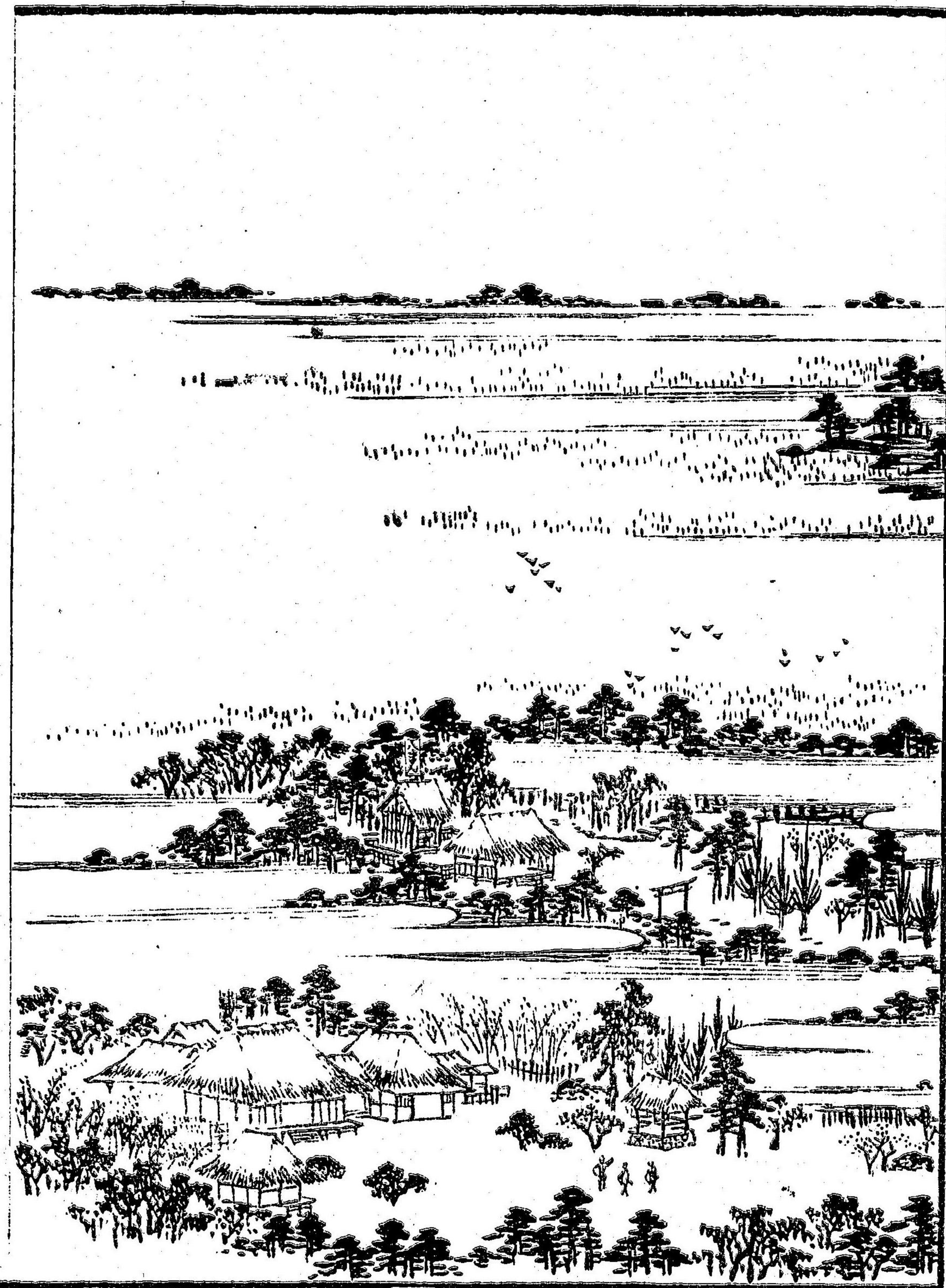


廣目天王

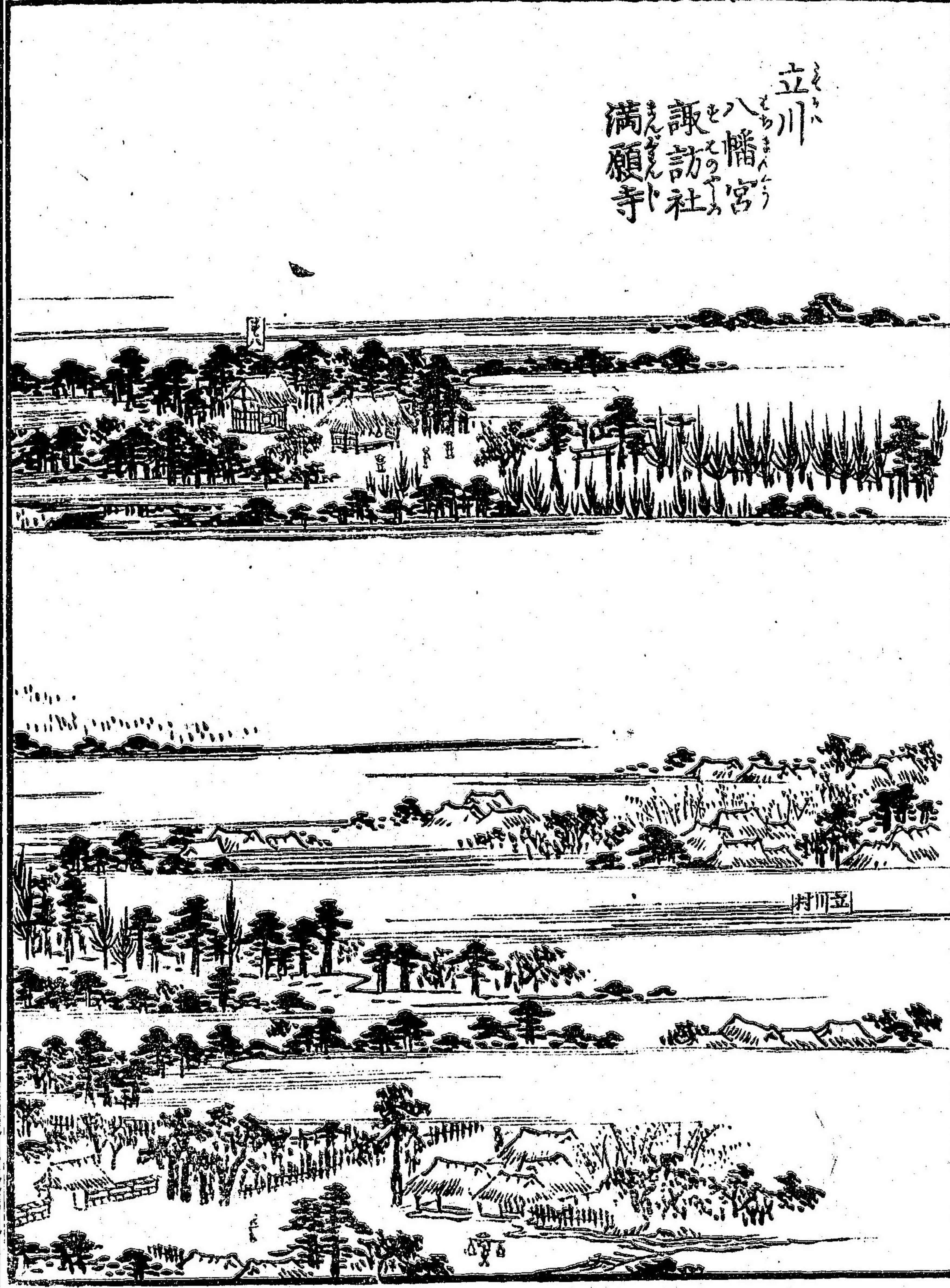


當寺境内の地ハ多磨川の流小臨と勝景の地なり富士新根秩父郡の遠嶂等一望小遊り尤幽趣あり北の方ハ往古立川宮内大補某々城營の旧址ゆへ其形勢を存懐旧の情を催さむ又小田原の北茶幕下なり一五十嵐小文治といふ人も此地ハあり一由土人云傳へり前小頭せし永祿三年の感状あり五十嵐市左衛門といふ名を注しり何れも其氏族の徒なり一此故今も此地に五十嵐氏の人尤多一按五十嵐小文治ハ和田合戦ハ朝比奈義秀に討れり人なり是を混しと云

八幡宮 同所二町を北の方あり神主宮崎氏奉祀を祭神本多別命一座相傳建長四年癸子八月十五日勸請せりと云本地佛ハ阿弥陀如来ゆへ黄金仏丈四寸八分あり弘法大師の作なりといふ有面ハ後光佛と稱する其甚古色なり然るも天正年間野火の爲ふ神殿有とあり此時に至り本多失



立川  
八幡宮  
諏訪社  
満願寺



立川村

あひく其所在を知る人なり。仍此地の領主立川宮内某の室  
此より深く敷き思ひ新に彌陀像一軀を鑄く當社小収らんと  
し佛の背に鑄所の文次を記せり。按は新像の隣は佛鉢のあり  
其後宝永年間宮社を造立せんとせし時境内松の枯株の根を  
穿ちて鋤下小失入所の本地佛金像の彌陀如来を得たり。  
又安永五年の夏賊の爲に奪はるといふとも靈威あるを  
以同年八月四日再當社小還座なり。あつとつと

天正年間新造立所之本地佛之銘曰  
武州多磨郡立河郷芝崎村八幡本地并與願主  
于時天正拾四甲戌年三月十五日  
本願大夫式部  
大工推名土佐守

後光鏡之銘曰  
武州多磨郡立河郷芝崎村八幡宮 鏡一面  
爲家内安全  
元文四年己未八月

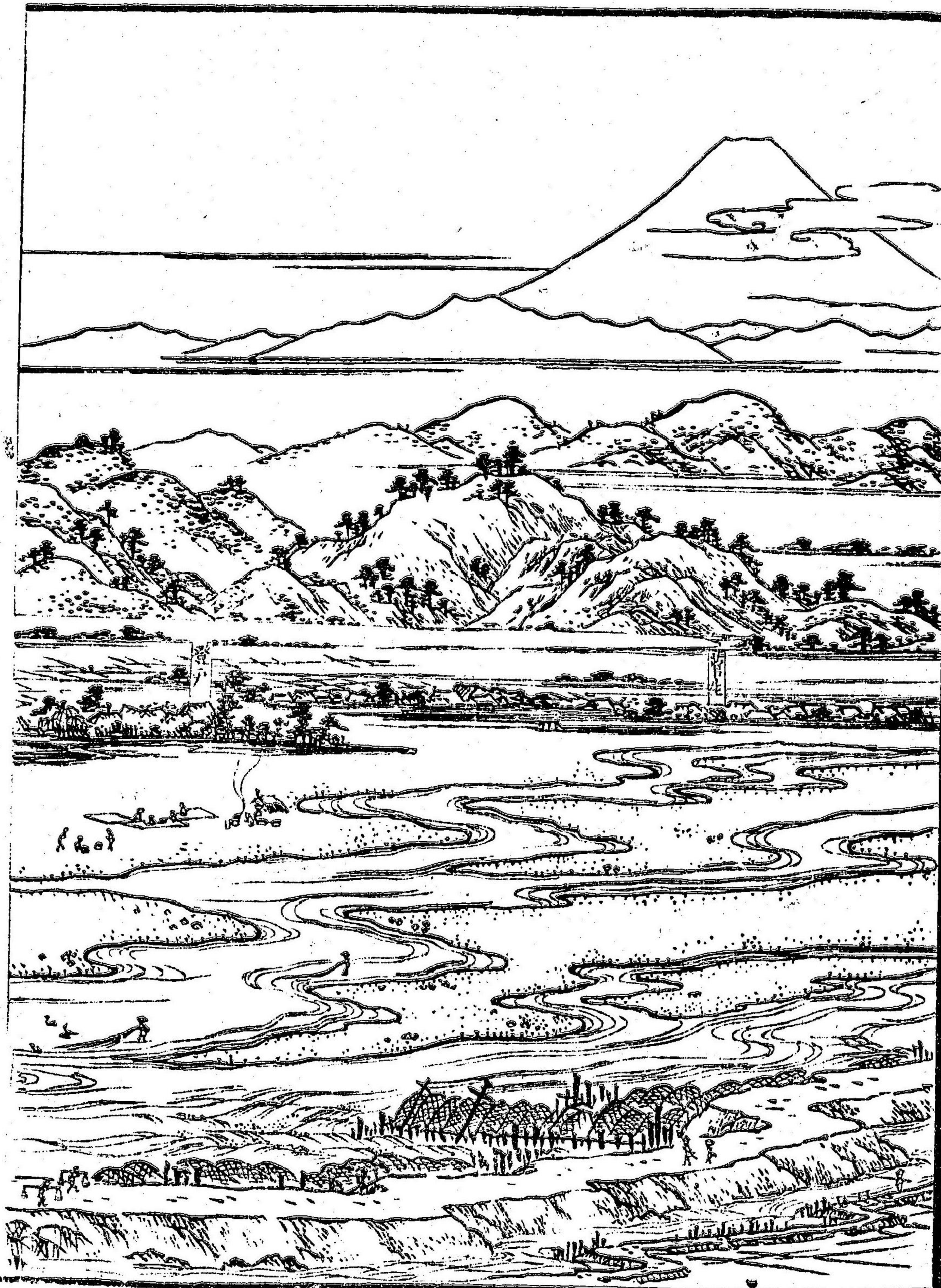
醫王山萬願寺 同所南の方四十歩計を隔り黄檗派の禪窟  
やくて鏡牛禪師居住の草庵の旧跡なり。と後小一宇の蘭若と  
なせしとのみ本寺薬師如来八座像三尺計恵心僧都の作中  
殿土小日光月光十二神将等の像を安せり

額 本堂 額 堂内  
向 拜 額 堂内  
一 掲 南 額 堂内  
岳 悦 山 筆 額 堂内  
山 王 醫 院 東 光 院  
高 泉 院 東 光 院  
高 泉 院 東 光 院

石産悲涼を大地世の業州  
蒼空垢淨通は界志危揚揚

諏訪社八幡宮より六十歩斗東より祭神建御名方命一座相  
傳ふ弘仁二年辛卯七月廿一日勸請せしとのみ當社小宮崎  
氏兼帯奉祀す

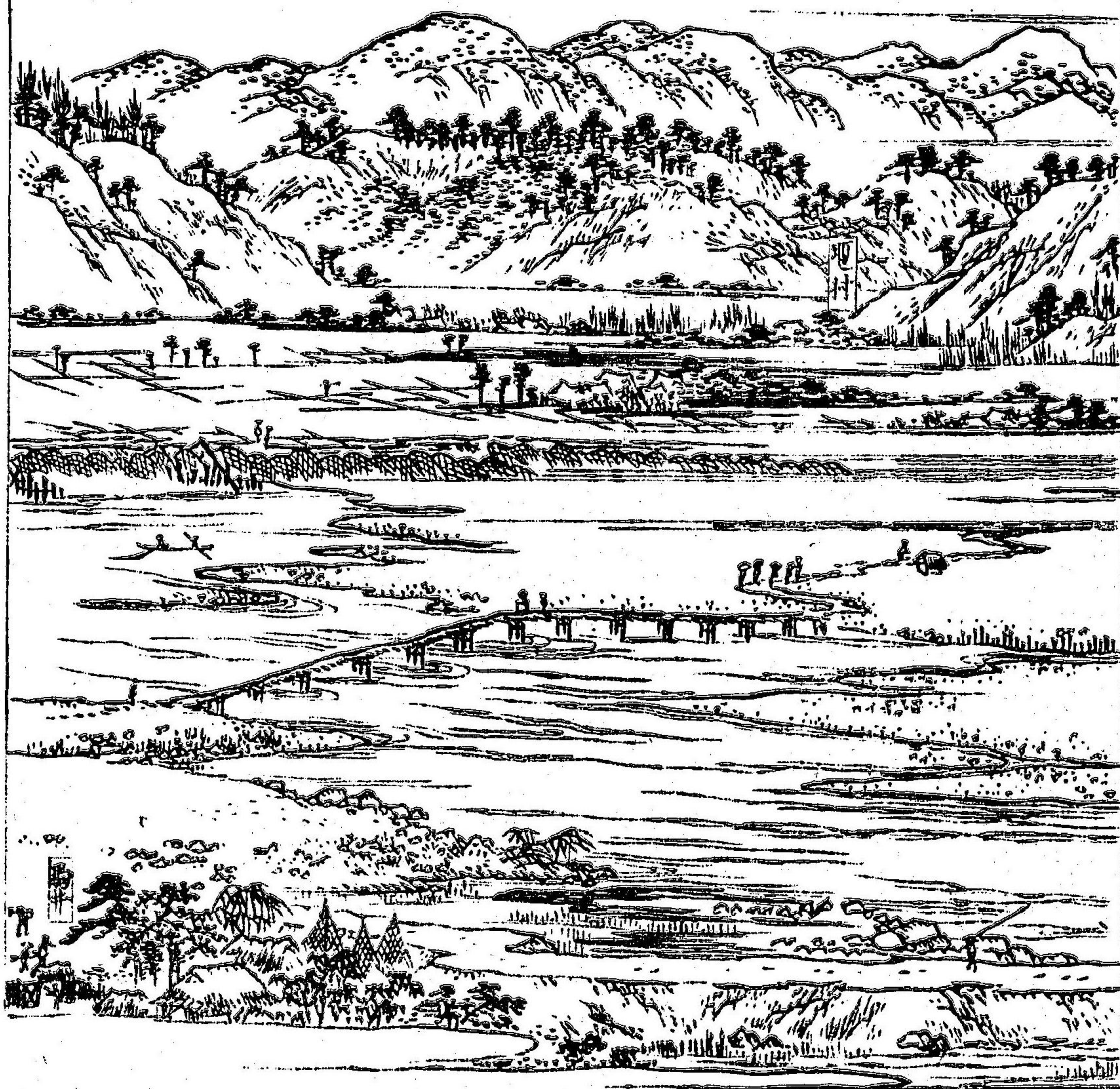
多磨川 當國第一の勝槩とて  
篇多摩川と共小あはせく六玉川と稱せしより  
此川ハ武蔵の堺丹波の郡の時池上より流るる  
日蓮上人法華講大士臨終の時池上より流るる  
武蔵國田波河



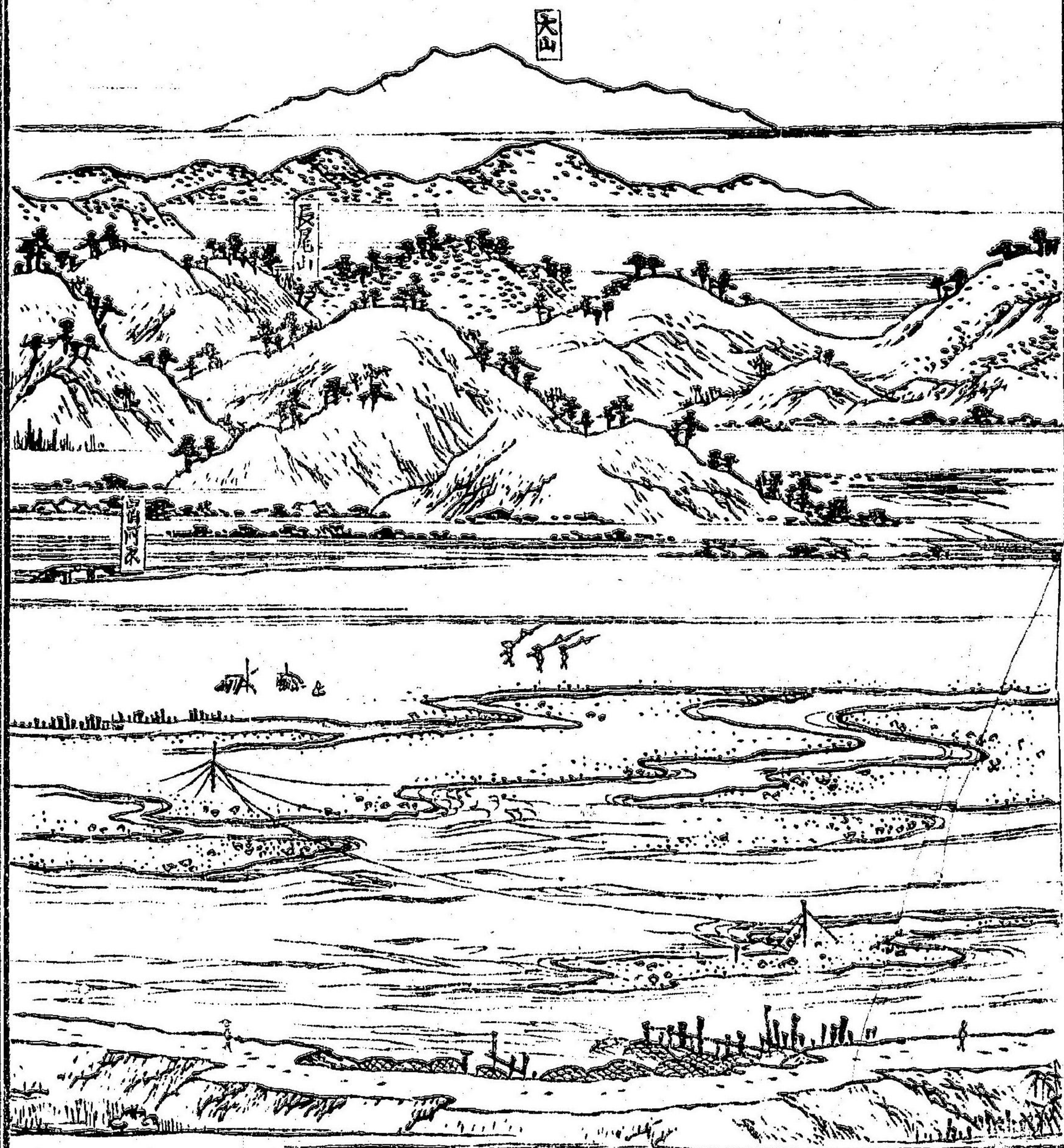
多磨川  
六五里の  
遊は假

高尾山

玉川ハ砂場廣  
 豁中々其流れ  
 一帯ニあらず多く  
 雨後杯ハ渡口  
 移轉して定まり  
 舟西此日秩父  
 山を望み甲州の猪  
 垣塘の斜に連る  
 と見え船と川  
 の産とす夏秋の  
 間多し常  
 不漢人絶也



二其



全玉川獵點



夫宋  
浮舟  
親王  
家  
解舟の  
彩舟を  
五川の  
新舟を  
光  
ほ

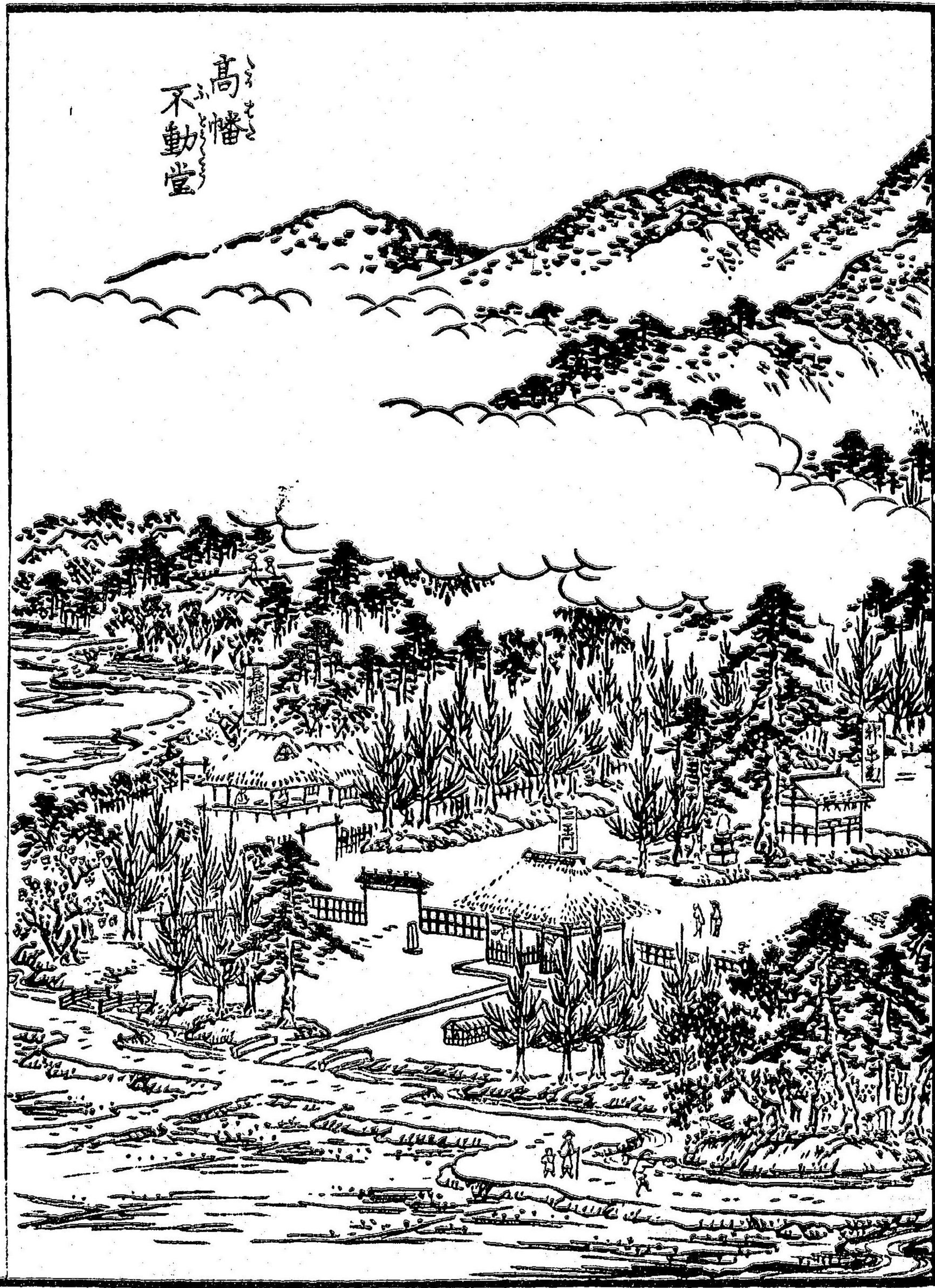








高幡  
不動堂



なり予是を... 住持... 不動堂... 古鵜口一口... 九十四字と刻す

故白 奉懸

右尋當寺者慈覺大師建立清和天皇御願所第二建立  
彼時頼義朝臣自於登山奉崇八幡第三建立永意得  
行壑兩檀 大檀那美作助真并記氏一宮田人銅師源恒有  
文 永十年关西五月廿日

銀念西守氏 鐵青蓮

服石 不動堂の後愛宕村の傍あり市六尺と云高サも五六尺と云あり  
後諸の佛神... 二王門... 額 高幡山 僧浩然筆  
額 高幡山 僧浩然筆

鼻井 庫裡の前法の方の山の裾あり廣サ七尺斗の井泉と云相傳建武二年乙亥八月  
鎌倉大草紙曰亨德四年正月廿一日武州府中分倍川原へ寄來る

成氏五百餘騎ゆく馳出短兵急まどり火出る程攻戦ひける  
間上杉方の先もの大將右馬助入道憲頭深も負く引わひける  
高旗寺の自害に鎌倉勢も勝軍はあられとも石堂一色以下百五  
十人討死し戦ひはくも分倍河原小陣を取云  
縁起曰平山武者所季重幼より當寺の不動尊を崇敬し世に強  
勇の名を顯せり治業の頃平家追討の時鎌倉の右大將家  
屬一義経小隨ひく西國小趣き一の谷小勇を揮し武名世に  
明らけし故小平後當山の頂小此中寺の御堂を建立を然も建  
武二年乙亥八月四日暴風の災小罹り殿堂破壊を依後平  
地より其頃の財主の平助綱母の大中臣女等ありとのみ  
尔来天下風水或は疫癘等の諸災おんともなは佛鉢汗を生  
しあり其威靈ハ拔擧せしむ

木切澤 金剛寺より半町を西の方の谷を云平季重所建堂建立  
の時此所より堂材を伐せしむと云後

番匠谷 同く一町を西へ入る谷と云是れ寺重所堂

別旅明神 金剛寺より三町を東の方別旅邑よりわたり此地の産

土神より則金剛寺奉祀の宮社より傳へ云金剛寺の本尊不動

明王の殿士二童子を彫刻せし異僧の像を造り終るの後立去

らんとす近里の道俗喜悅のあり其跡に隨ひて此地より来り

たるふ件の異僧ハ忽よこゝにひたりぬ貴賤奇異とて此地ハ社を

建立し別旅明神と称す地名も又別旅邑とのを

平惟盛之墓 金剛寺より一町を西南平村隣より農民又右傍つ

ととる人の構の中あり青き一片の板石より高サ七尺五寸ひり

巾二尺程厚サ二寸ありを上の方よりきりく字を彫下ふ文永八年辛未

中冬日とあり土人相傳へて平惟盛の碑なりと云往古此地ハ平助綱

と云武士住を平氏の遠裔なるとハ惟盛の菩提を吊りてなる是哉

造りし年歴を或ハ又助綱の墓なりとの云同く南の方二町あり山を

平村  
平惟盛  
古墳



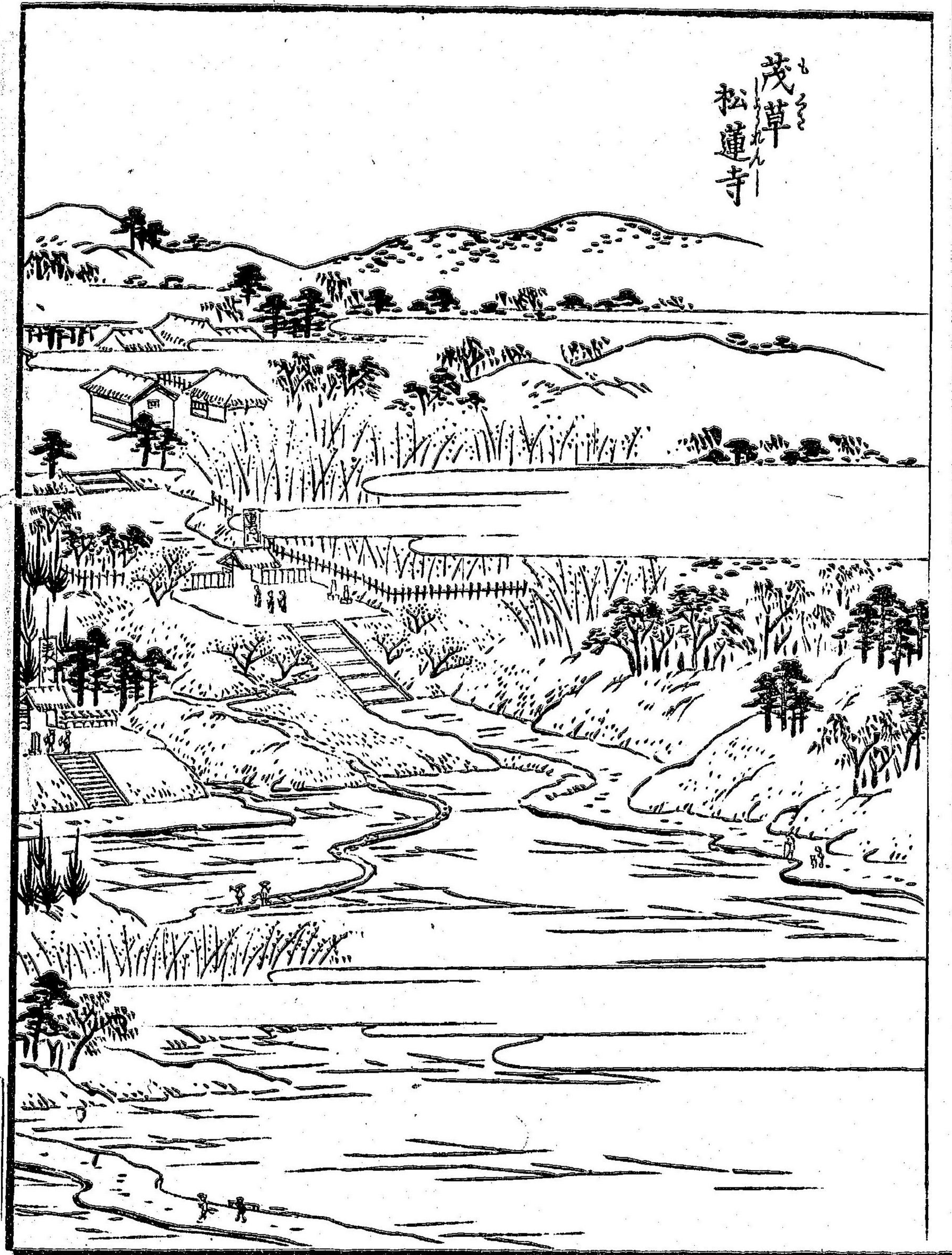
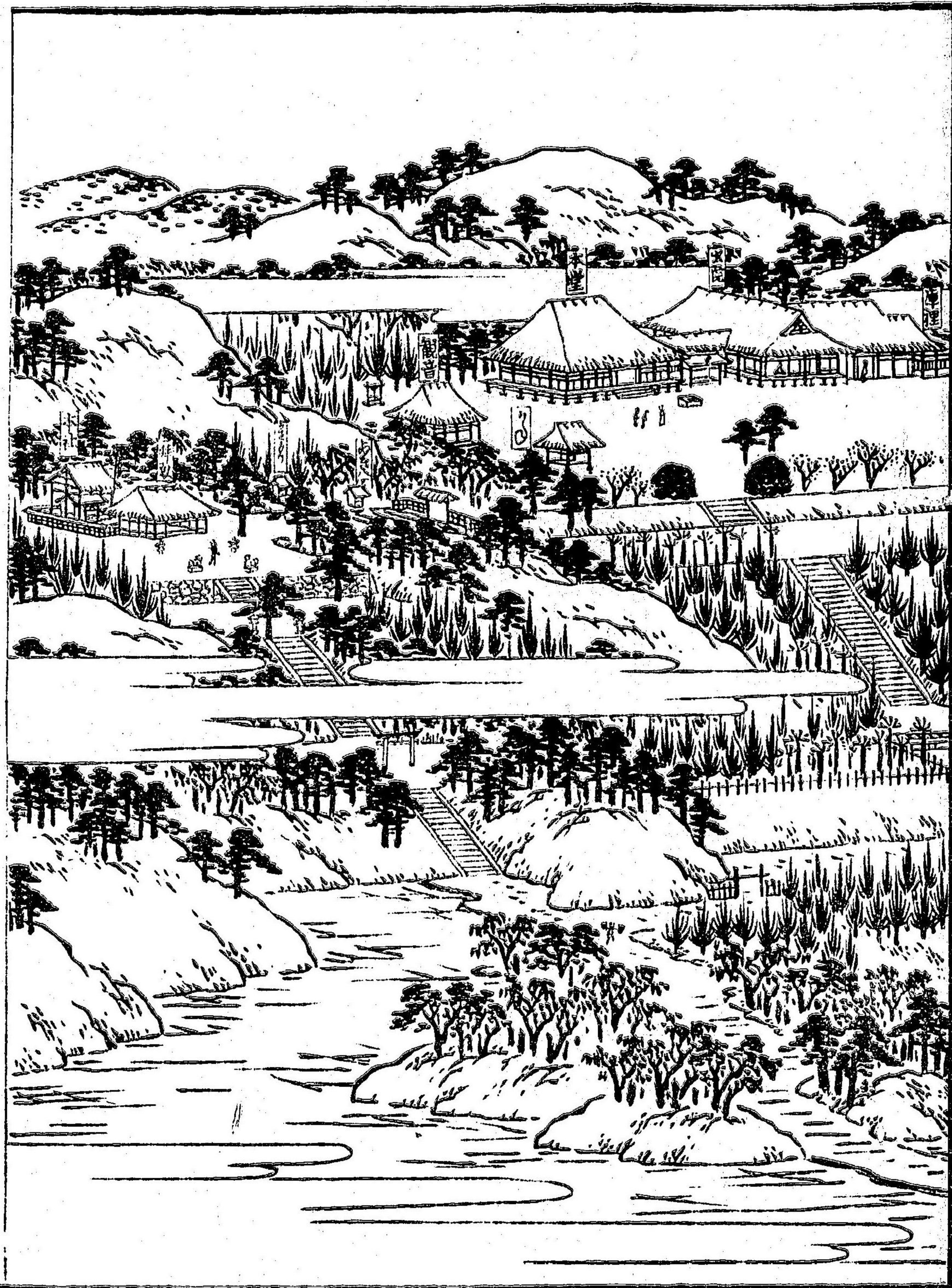
登りて中腹ふ又古碑あり剥落して讀へず只平の二字の  
鮮明なり高サ六尺餘り巾二尺をり下ハ土中ニ埋むる餘古石塔  
二基何れも高サ四尺をり何れも土人平山季重或又平氏の人の墳墓  
と云傳へて分明ならず此所ハ農民平氏某の家累世の此地邑名を平  
と稱し殊に平氏の人多し里ニ平氏の家ハ小田原北条氏直の下  
文ありとの事

慈岳山松蓮壽昌禪寺 高幡より十二町東南の方百草邑にあり  
昔ハ淺草ニ作るハ幡宮社地ハ源頼義義家兄弟奥州  
征伐凱陣の時山号州井を改く増城とすと云々 黄檗派の禪林に  
しく江戸白銀の瑞聖寺ニ属せり昔ハ天台宗中へ増井山と号し  
天平年間道璿の高弟釋道廣大勸進して始て七堂全備の精舎を  
創建せりその後康平五年伊豫守頼義奥州下向の時此地をのきり  
あひ松蓮寺ニ投宿しハ幡宮を再興ありて朝敵追討の祈行願  
あり又建久年間頼朝卿以來源家累代の祈願所と定られ建長

七年當寺の住持祐慶相州より琳長師を請りて禪院を改むると  
又慶長十五年松蓮寺方丈建堂の棟札あり本尊釋迦佛座  
像三尺斗あり脇土ハ阿難迦葉の立像三尺なり佛師藤村中圓  
彫造せり所なりと云中圓ハ華人やと肥前長崎にありと云 中興開山ハ慧極和尚と  
号せり 享保六年辛丑 享保二年丁酉大久保加賀守忠英彦比  
夫人壽昌院殿慈岳元長尼中興開基と云元長尼ハ享保六年薙髮し  
三室を恭敬一竟又當寺を再興 本堂内陣の額松蓮壽昌禪寺の六  
大字及び總門額慈岳山等ハ何れも中興開山明慧極の筆なり  
本堂の前ニ揚々紫金光の額ハ隱元禪師の書なりと  
經筒 三箇其銘文左の如し一ハ銅を以製す長九寸二分口  
廣と四寸五分

長寛元年癸未十月十三日

工匠藤原守道



大勸進聖人僧辨豪  
 如法書寫者僧玄久  
 奉納妙法蓮華經  
 僧觀賢  
 僧定阿  
 僧定瑞  
 僧定久  
 僧定尊  
 僧辨意  
 大勸進  
 聖人  
 僧辨  
 豪  
 如法  
 書寫  
 者  
 僧玄  
 久  
 僧觀  
 賢  
 僧定  
 阿  
 僧定  
 瑞  
 僧定  
 久  
 僧定  
 尊  
 僧辨  
 意

駐仕僧樂西

同一箇  
 銅を以て製す長七寸五分口廣と  
 渡り四寸一分其文左の如し

大勸進

僧堯尊  
 大檀主藤原氏滿貞刊  
 永萬元年九月十七日天

其蓋裏曰

大勸進所百草村  
 松連寺

同一箇

金銅を以て製す長五寸口廣と  
 三寸一分其文左の如し

兼命祈

日本幕下  
 一宮別當  
 建久四年八月松連寺修之

八幡宮本地佛阿弥陀如来像金銅一尺一寸あり土中出現の物に  
 佛躰の脊より鐫所の銘文あり左の如し

敬白治磨金銅影像法林  
 為皇滿安日本主君當  
 願成就師長法界二親  
 悉地往生乃至法界二親  
 同共往生乃至法界二親  
 大歲庚戌孟夏之天  
 日本武州多西吉富  
 願主佛子慶祐故白  
 真慈悲寺  
 地頭名主  
 子孫平安  
 助成合力  
 建長二年  
 南簡淳提  
 施主源氏

按ふ當寺の御佛面  
 二年二月三日の祭下武蔵野  
 真慈悲寺の御佛面  
 東鑑文治



ともいふに、此寺は、かつては、伊具の備なく、僧ハ夫鉢の賜を失入  
接し、僧あり、今日、教上しく、當寺より、一切を安置し、破壊と修理せしむるの旨  
申請の向、際主職を補せらるゝとあり、又同書、建久三年五月八日の条、下  
法皇四十九日の御事、南御堂は、於て修せしむるに、百僧あり、僧衆ハ、真慈  
悲寺より、三〇とあり、又同書、治承五年四月廿日の条、下、山田三郎、支那、多  
摩郡内、吉雷井、宮連光寺等の地を、自の所領に、併し、せしむるに、  
吉雷ハ、此辺、たゞと、あり、されども、真慈悲寺の、頃、廢せしむ、今、其、田、返、入、と

八幡社記曰、建久四年、鎌倉右大臣、義家、法華經を、書寫し、金壺に入、當社に、納  
め、其書、寫せる、所の、行、法華經の、文字、多、く、ハ、打、懸、し、く、僅、は、残、り、の、と  
升井、常、是、と、稱、せ、七、清、泉、と、  
八國見、本堂の、後の、山の、上、あり、此、河、の、登、れ、ハ、八、箇、國、の、

二王塚、松蓮寺より、東南、五丁、あり、と、隔、て、る、山、間、の、以、く、小、高、と、所、ハ、松、樹、十  
の、あり、古、大、伽、藍、あり、と、又、宝、藏、と、稱、せ、る、地、也、此、下、を、新、堂、と、稱、せ、る、ハ、古、堂、宇  
殿、せ、り、古、大、伽、藍、あり、と、又、宝、藏、と、稱、せ、る、地、也、此、下、を、新、堂、と、稱、せ、る、ハ、古、堂、宇  
ハ、今、の、觀、音、の、像、を、く、ひ、ひ、石、瓶、折、壞、の、刀、劍、數、十、柄、華、皿、等、の、と、く、ハ、此、所、

百草八幡宮、松蓮寺より、西の方山の中腹にあり、則、松蓮寺奉祀の  
宮、を、八月十五日を以、く、祭辰とす、本社向拜の、額、八幡宮は、三  
字ハ、梅小路大納言定、伯卿の、筆、あり、寺僧曰、正殿の、安置、せ、る、の、

神、跡、ハ、八幡宮、神、宮、土、仁、津、戸、明、神、武、内、大、臣、義、家、公、等、の、木、像、  
なり、と、云、相、傳、東、平、五、年、源、賴、義、義、家、而、公、奥、州、の、夷、賊、征、伐、の、時、  
山城國、男、山、正、八幡宮の、社、檀、の、土、を、穿、ら、て、石、瓶、の、盛、來、く、一、宇、の、  
社、を、造、営、し、く、此、地、は、勸、請、な、り、と、願、書、等、を、収、め、る、其、後、凶、  
徒、悉、く、平、け、凱、哥、の、時、再、此、地、に、至、り、と、ハ、金、銅、の、觀、世、音、の、像、  
を、も、安置、し、永、く、祭、祀、を、不、朽、と、傳、へ、ん、と、ハ、此、觀、音、の、像、ハ、松、蓮、寺、の、  
石、の、祭、田、を、寄、附、し、と、云、且、兩、將、軍、の、隨、兵、等、の、各、軍、功、を、祈、り、帶、き、て、此、の、  
刀、杖、を、収、め、神、德、を、謝、せ、る、來、録、倉、賴、朝、卿、當、社、の、神、を、崇、敬、し、  
め、建、久、四、年、法、華、經、を、書、寫、し、金、壺、に、入、り、奉、納、あり、と、云、  
星、霜、を、經、く、件、の、宝、器、散、失、せ、し、と、云、德、年、間、二、王、塚、の、地、を、穿、て、  
再、ハ、是、を、得、し、と、云、寺、僧、云、當、社、境、内、の、樹、木、枯、る、後、ハ、悉、く、  
奥、州、の、方、へ、向、く、倒、る、昔、より、今、に、至、り、今、至、り、と、云、是、當、社、に、  
一、奇、変、あり、と、云、

一宮大明神社 百草八幡宮より十五六町北の方多麻川の南岸一宮

村あり 一里ありを隔つ 祠官新田氏大田氏両家より奉祀せ祭

神ハ天下春命なり 後瀬織津比咩及び稻倉魂大神と合祭ス

三神一社三座とす 祭神今ハ小野 舊事本記ニ饒速日命 地神ニ天彦

此葦原の中津國ハ降臨シ多ム時輔佐トシク隨駕シタリ

三十二神の其一神ヤシク即三十二國ハ分降多ム時信濃國ハ

天表春命武蔵國ハ天下春命降臨ナリ多ム國と聞キタリ

と云々

社司相傳神代ノ昔當社下春命此地ハ止マシムルハ或ハ又國ノ祖ノ神ノ功ヲモシキ  
樹ノ國ノ神トシテ記スルハ今モモシキナリ 社傳ハ一宮下春  
命小野宮村小野神社ニ遷座アリケル倉稻魂命と配祀ナリ 小野神社三神トシテハ  
三時世詳ナリ 後一宮ハ國ノ祖神ハ同郡ノ同社トシテハ國造崇徳アリケル倉稻  
魂命ト共ニ合セテ再ハ六所ノ宮ノ相殿ニシテモシキナリ 社傳ハ一宮下春  
命ハ三所ノ神與ト供奉シタリ 又毎歲五月五日六所宮大祭ノ辰當社ノ祠官舟中ニ至リ一宮小野  
又供奉シ六所宮小至リ神ノ後ノ後ノ神幣ト守護シテ直ニ一宮ニ歸リ當  
社ノ内殿ニお茶盛ト供シ祭奠トナリ 社傳ハ一宮ニ歸リタリ

一宮大明神社



按當社一宮の事旧史に見ゆるも既此地名を一宮と号稱す一宮と  
稱す一宮と國の祖神第一鎮座なり一宮と稱す一宮と  
山田三郎重成平太公貞の所領を自の所領に依りて東鑑治承五年四月二十日小  
吉富なる一宮別當松連寺の地を或せ草村松連寺所藏の建久四年の経  
簡中の一宮別當松連寺と銘せりある時八建久のむら松連寺當社の別當  
一宮又高幡城金剛寺に存するの文永十八年の興口の銘も一宮田人銅師源経有  
り一宮の地名往々見ゆるなり

一本搜一宮より南の方半町を隔て耕田の中より樹の本に  
注連を繞らせり土人百草八幡宮の一鳥居の回廊なりと云  
八十町と

横溝八郎墳墓 小山田田園の地より一町あり西南道より右の方の畑の

中より塚上松槻等の老樹繁茂せり太平記は正慶二年五月十日  
新田左中将義貞公武州分倍河原へ押寄るとの条下より四郎左近  
入道相模入道の合衆大勢なりと云も三浦一時的謀み破られ落行  
勢ハ散る小鎌倉を以て引退く討む者ハ數を不知大将左近入道の  
関戸辺あり已に討たぬと見えと云横溝八郎踏止りて近付敵二ト

三騎時の間射落し主後三騎討死を安保入道道堪父子三人  
相隨入兵百餘人同枕し討死を其外譜代奉公の良後一言芳恩に  
軍勢共三百餘人引返り討死する間は大將四郎左近入道ハ身

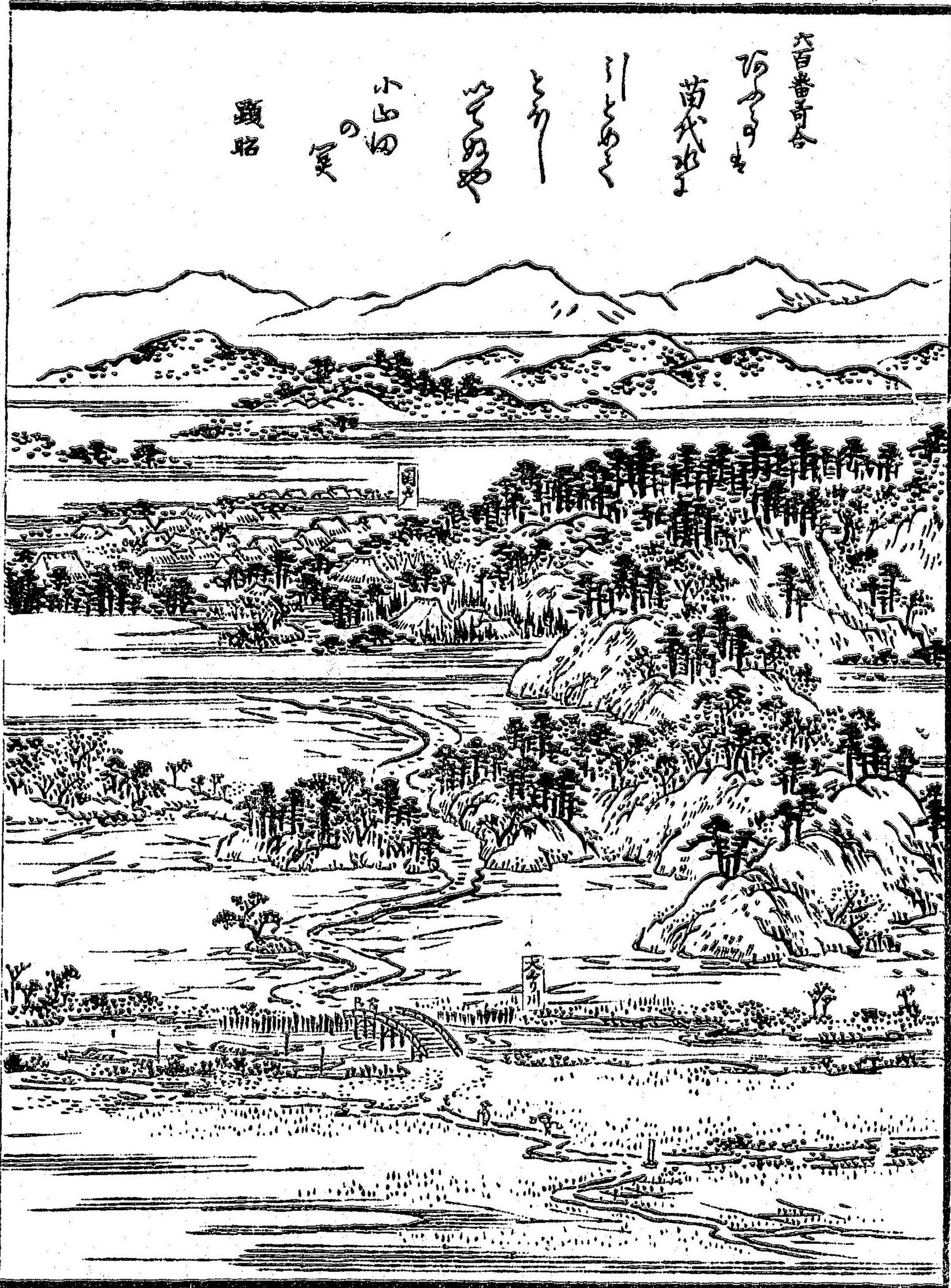
恙なく山内迄引れり今あり 安保入道父子の墓も此近きあり  
構の中は古墳あり上は極の古樹茂りありされとも何人の墓の印あり  
小山田關旧址 今関戸と稱せり則これなり 或人云此地熊野社遺

北越の二道共此地を往還せりハカ  
田村と稱せり今ハ邑名との残る此所より二里も南の方ハ小山  
夫木

六音番奇合  
或考世  
あか

東鑑曰 治承五年 四月廿日 小山田三郎

六百番町合  
 阿多  
 苗代  
 川  
 小田  
 美  
 磯



小山田回  
 関戸惣圖



重成卿背御意之開成怖畏菴居是以武藏國多學  
 郡内吉富并一宮蓮光寺等注加所領之内去年東  
 國御家人安緒本領之時同賜御下文訖而為平太  
 弘貞領所之旨捧申狀之間札明之處無相違仍被  
 付弘貞也云云  
 尚書曰建曆三年十月十八日清定奉行云云  
 同 為武藏國新開實檢被遺圖書允

按東鑑云我々の武藏國の新開地を注す恐らく此小山田は  
 其の東に武藏國の領地を注す恐らく此小山田は  
 成瀬高村の領地を注す恐らく此小山田は  
 金井大倉の領地を注す恐らく此小山田は  
 善三郎の領地を注す恐らく此小山田は  
 細山田の領地を注す恐らく此小山田は  
 家山田の領地を注す恐らく此小山田は  
 の證状なり二箇戸の由なり  
 芝原田の領地を注す恐らく此小山田は  
 又三箇戸の領地を注す恐らく此小山田は  
 岡錢五貫文有山源右衛門の領地を注す恐らく此小山田は

其地関ヶ原加為の意は少も私物に為同  
 自持令軍居の付るをこの為物事者之仍也件

子九月廿三日

憲秀 花押

有山源右衛門

此地ハ昔鎌倉時世關を居られ舊中々建久の頃ハ鎌倉の  
 右大將家淺間三原及ハ入間野等へ所符其餘陸奥上毛信濃越  
 後等へ軍を發し多し時ハ必しも關戸口の大將を定られし諸  
 書ハ我々の太平記ハ正慶二年合戦の条下ハ義貞數箇度の戦  
 ひハ打勝多しゆと聞えりハ東八箇國の武士とも順付り雲霞の  
 如く關戸ハ一日逗留あり軍勢の著到を看らしむるハ六十萬七  
 千餘騎と注しあり此所の事なり  
 延命寺 壽德寺より三四町南の方道より右側より地蔵院と号  
 時宗中々相州藤澤の清淨光寺ハ屬を本寺地蔵寺ハ立像一尺  
 五寸とあり作者詳なりハ關山を普國上人と号す門比入口



右の方畑の傍に榛木の老樹を以印とせし古塚あり正慶二年  
武蔵野合戦に討死せし四百餘人の墓なりといふ

城山 延命寺の後の山積を以て土中稀に古瓦を得る所のありとせし

其城主及び時世を詳ならず土人云昔小田原北条家の幕下関戸

駿河守とてありとせし又永祿の頃佐伯市助道永といふ

武士小田原の北条家仕へ此地に住せしとせし

明徳元年庚午念阿護法入道此地に一寺を創建ありて吉祥山

壽徳寺と云禪院を再興せし此寺は関戸入口道より右側あり

なり日舜宗惠大和尚を請へて中興関山といふ

年己巳二月三日陸奥小瀬免道永の子孫三河守道也和泉守道安同輩人

天守臺 同一山積西の方より城山の半腹より曲折して山頂あり

まて老松繁茂す此所より四望せし尤絶景なり

推現の宮と云

沓切坂 下関戸の宿の南の坂を云坂の上を古市場と唱ふ昔高戸

驛合ありし地なり天正己未此地の古道廢して今ハ名のみとな

とせしれと府中より横切て相州矢倉澤大磯等への官用の次

場なり

合戦の時新田義貞公脇屋義治公絶し二百餘騎を討ちし此所の

勢も散りし行方なきなり

打入り足利左馬頭基氏は逢く命を失はせと夜半過り頃関戸を

過りし石堂入道三浦介等の五六千騎の勢は出建りし神

奈川を徑鎌倉へ打入勝利を得り頃此坂より馬の沓をとり

とせしれと打あやを依り名とすといふ

赤坂臺 関戸より十六七町東の方蓮光寺村を横きりて赤坂と号

く坂を登れば赤坂臺なり一里半斗を徑て河原谷と云地あり

平臺 赤坂臺の東の積を以て此所は三圍よりせし老松一株あり

土人甚兵衛松と字を此地ハ矢の口ハ属す

騰雲山明覚寺 矢の口村街道より南の横より渡一場の南拾五町

臨濟流の禪林中々鎌倉建長寺ハ属す本寺の釋迦如来ハ

唐佛中々座像八寸をかりて當寺ハ往古足利義晴公建立なり

佛刹中々其後廢寺となりて慶長年間加藤太郎左衛門再興

一と菩提寺となりて中興基ハ揚雲和尚中興なり

長坂血鎗九郎陣中守護の爲鎧の中ハ籠まりしと云ハ伽羅の正

觀音と安置せり立像三寸をかりて弘法大師の作と云ハ一尺斗の

正觀音と彫造し中興中ハ秘安せり

小澤小太郎居宅旧地 當寺境内の辺を云今猶馬場の旧跡なりと

称す地あり又當寺の前ハ小高き岡ありて藏地下と号す

兵糧を収る倉の跡なりと云 此の小澤の城址の茶下ハ小澤某の墓と

小澤山威光寺 同所明覚寺より道を隔て二丁斗向ハ側二丁斗左へ

入るありて新義真言宗中々坂濱高勝寺ハ属す水邊ハ大日如来

座像三尺をかりて當寺ハ穴澤天神の別當なり 天明年間火災ハ

悉く焼亡し 罹りて殿堂僧坊

東鑑曰 治兼四年庚子十一月十五日 祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

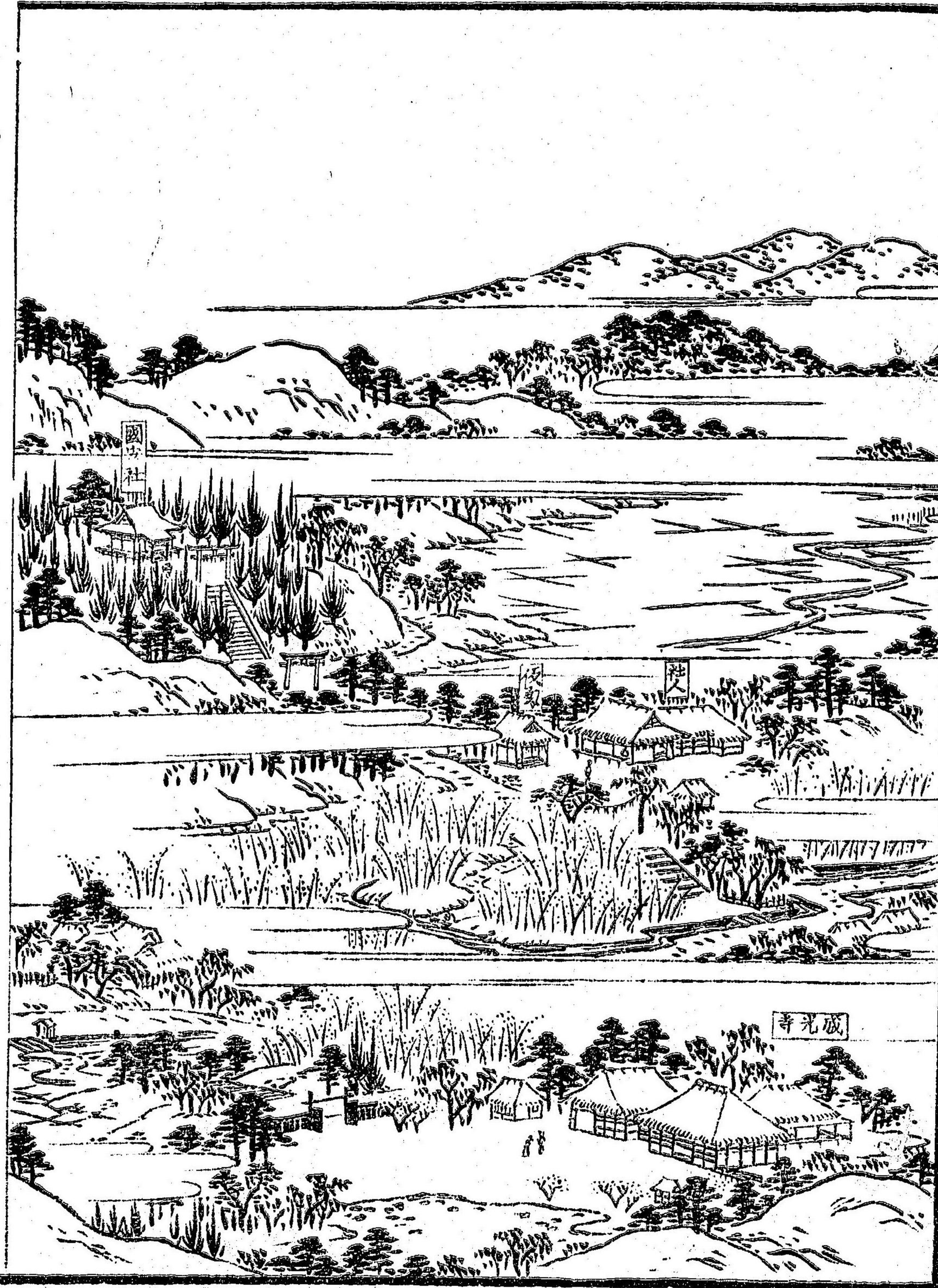
武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

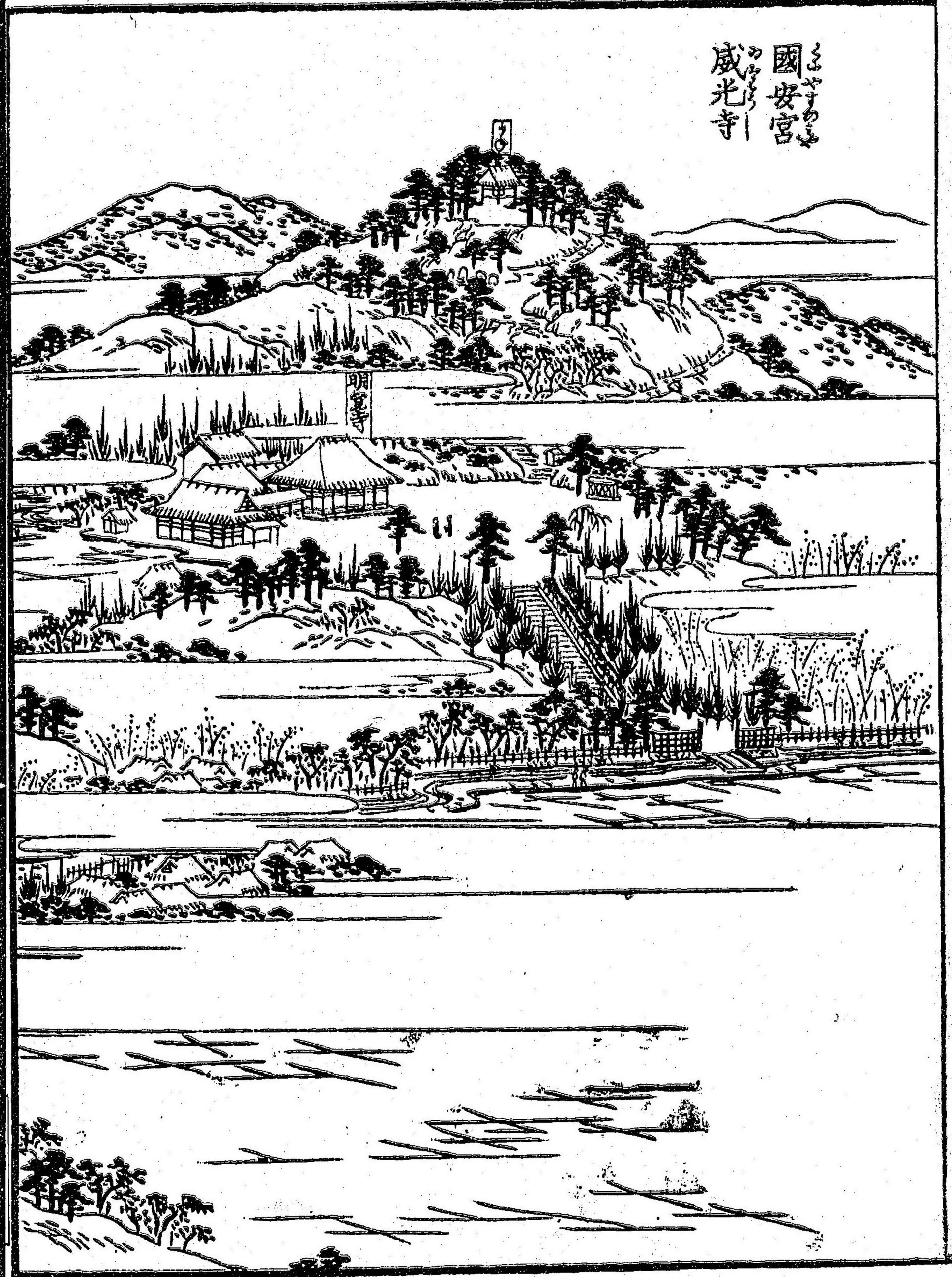
武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺 僧元暦二年坊寺領 如元被奉御祈禱所院主僧





威光寺



國安宮  
威光寺

此の地より程遠く東鑑州本は拍江は作ら誤なり  
 江所の難司其間七里隔つべしされども當寺ハ天明年間火災ハ旧記ハ  
 國安明神祠 威光寺の南五十歩斗を隔く同一側左の小道を三十歩

申入るあり 神主山本氏奉祀す 神躰ハ左のめきとのふく世云所の  
 鑄形の神像なり 相傳又往古小澤左衛門尉國高と云る人此地を  
 領す 國高此地は道遥あり一頃松樹の下は白髮の老翁現し尔  
 しく曰く我ハ大國主神なり此地は崇祀らる万民國安かといと云  
 國高奇異の思ひを宮居を営んてたふ國安明神と崇め  
 祭す社領の地八百五十坪を寄附あり武運長久なるを祈  
 念すとの

按は小澤左衛門尉國高ハ東鑑州奉らるの小澤次郎重政同左近將監  
 信重なるの氏族の人なりん其時世今あつと云ん

國安神像

銅物 應安六年辰八月十日  
 本願主 山本權律師信信



花瓶のあり  
 上方よりあり神躰も  
 僧形あり宝珠と  
 劍と持し  
 形なり

穴澤天神社 谷口邑威光寺より東北の方三町斗を隔く同一往還  
 右の方小道を入てあり社ハ山の中腹あり此辺を小澤原と唱今  
 祭神詳ならず後世管神を合祭せり祭礼ハ七月廿五日なり又同日  
 神樂を修行し九月廿五日ハ獅子舞を興行を別當ハ真言宗にて  
 威光寺と号せ

延喜式神名帳曰 武蔵國 多摩郡  
 穴澤天神社云



武蔵國風土記殘編曰 武蔵國 多磨郡 芳安天皇  
 四年壬辰三月所祭少名彥神也云云

當社の麓を淵水流きく多麻川は合を其流を隔て山岨一の  
 巖崖あり故に穴澤の名あり昔の巖洞ハ崩れたり今新に堀  
 穿て洞穴あり洞ハ一や二に分てあり

小澤城址 谷口天神の山續浅間山の西に並へ東鑑は元久二年丑六月

廿三日稻毛入道大河戸三郎を為し誅せし子息小澤次郎重政ハ宇佐美與二

見と誅せし又同書同年十月三日小澤左近將監信重綾小路三位師季此

息女を相伴少く京都より泰着を行先を以夏の由を尼御臺より啓せ下畧又

同月四日夜は入綾小路の姫君尼御臺所の沙亭より泰ら御猶子とて此後

武蔵國小澤郷 知れせしるべきの由仰らとあり鎌倉大草

紙の文明九年長尾四郎左衛門尉景春山内に杉の家務職を奉ら

ざるを憤り逆心 企頭定を亡しんと武州相州の内一味同心此



武蔵國風土記殘編曰 武蔵國 多磨郡  
穴澤天神 三月 祭以名多神也 云云  
四年 壬辰 三月 所祭以名多神也 云云

當社の麓を淵水流きく多麻川は合を其流を隔て山岨一の  
巖崖あり故に穴澤の名あり昔の巖洞は崩れたり今新に堀  
穿して洞穴あり河口ハ一ヤク内ハ二ニ分てあり  
内は神佛の石像を造立す

小澤城址 谷口天神の山續浅間山の西に坐して東鑑元久二年己丑六月

廿三日 稻毛入道大河戸三郎が為す謀せり子息小澤次郎重政ハ宇佐美與二

是と謀せり又同書ハ同年十月三日小澤左近將監信重綾小路三位師季此

息女を相伴く京都より参着を行先を以支の由を尼師基に啓せ下畧又

同月四夜ハ綾小路の姫君尼師基所の法亭ハ参ら御猶子と云此後

武蔵國小澤郷 梅道知於せりへきの由何らとあり鎌倉大草

紙ハ文明九年 長尾四郎左衛門尉景春山内上杉の家勢職を兼ら

るを憤り逆心 企頭定とせり武州相州の内一味同心此

兵を催し上杉身を襲ふる茶下ハ金子掃部助ハ小澤と云

城ハ指蒼門大田左衛門入道下知とく扇谷より勢を遣し同

三月十八日溝呂木の城を攻落を同日ハ磯の要害を責ら一日防

戦ハ夜ハ入るハ越後五郎四郎が参りて城を渡り降参せ夫あり

小澤城へ押寄せりて城難所少く落さし 景春一味の宝相

寺なるハ吉里宮内左衛門尉以下小澤の城の後詰として横山

打出當國府中ハ陣を取中 同年四月十八日金子掃部助ハ麓

小澤の城ハ責落せり

向の岡 今向岡と称せり地ハ多麻川を北に帯て西ハ関戸より發る

東ハ末長ハ終るもの是なり連岡の長九六里あり

或ハ云今向の岡と称せり連岡向の岡ハ武蔵國風土記殘篇

に考ふハ多磨郡北ハ向の岡ハ限とあり武蔵國風土記殘篇

西二十里の連岡なり四ハ共ハ南北東西五里屋山ハ八國山ハ東

向の岡の名あり今向の岡と稱せり地ハ都筑嶽とて一佳

武蔵國風土記殘編曰  
多磨郡東限草窪岡西限金川南限華田浦北限向  
岡云云

新勅撰

武蔵野の向の岡と云々

小町

續古今

武蔵野の向の岡と云々

如家

玉葉

武蔵野の向の岡と云々

後一条  
入道

同

武蔵野の向の岡と云々

定家

夫木

武蔵野の向の岡と云々

為家

家集

武蔵野の向の岡と云々

後鳥羽院

山林名所考

武蔵野の向の岡と云々

陸源

都筑

都筑の岳 綴喜或綴 小佛の嶺より小山田里迄ハ多磨郡ヲ屬セリ平山或モ

横山

横山ナリハ既ハ古奇也玉の横山と詠セテ皆此間ニあり又官林の

案内山

案内山と云より神奈川迄の間ハ都筑郡ヲ屬セリ南北ハ高底ナク

坂東路

坂東路凡百里シヨリありて續クナラフキの岳の名ありと云フ

青沼明神

司所長沼村ハ王子通道の傍ニあり祭神大田布孫田彦

大神二神なり

勸請の初とありハこの社司福島氏奉祀也祭禮也

八月十五日なり

大平記ニ正平七年閏二月小寺差原合戦の条下ニ將軍の御陣ハ

仙谷山壽福禪寺

谷の口の東の山嶺夫の口渡一場より十三町東南のガ

菅村ニあり

此地ハ多磨郡流橋樹郡ニ推古天皇六年戊午聖徳太子草

創ナリハ佛刹ナリ

昔ハ天台宗トシ建長寺の大安禪師の時

より禪林トシ

今ハ曹洞派トシ越前の永平寺ニ屬セ

本堂本尊十一面觀世音

相傳ハ鳥佛師の雕刻或云和州長谷寺の像と同本

鐘

右ヨリ井田六郎右衛門尉其應永七年庚辰當寺住持の以門比立宗匠の項

阿弥陀堂

同ハ左ヨリ觀應殿ニ号シ本堂ハ座傍四尺五鎮守宮

大黒彌天の四座

と号ス當寺十境の一ナリ 指月橋 當寺門外の流石架も板橋と

壽福寺



餐霞谷 同所の庫裡の後の谷と云道徳の旧跡なり故今採薬草

来り仙薬を攫霧松 同所の左よあり今枯れり土俗道祖神と云一椀五

方丈 晩成室とのみ

大般若経 六百卷 梵函は収蔵す低く黄色中く

其名を注せり相傳入文治年間源朝臣と形慶普此地を觀

寺觀音の御前相傳入文治年間源朝臣と形慶普此地を觀

補寫す永徳壬戌鎌倉左兵衛普氏講師の徳を慕ひ参詣の次再ひ此谷の靈蹟を檢

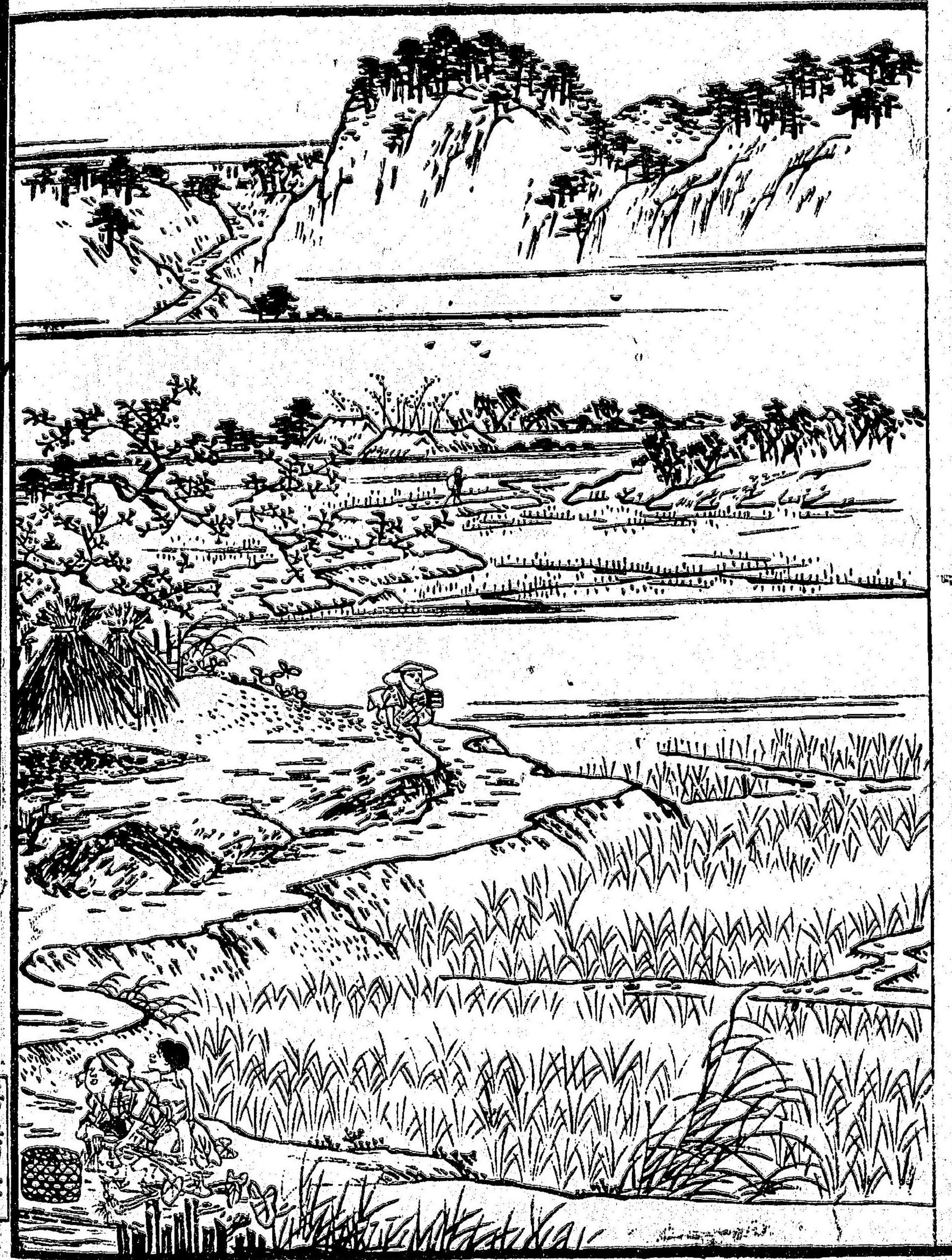
夫仙谷山壽福寺者推古天皇六代戊午年聖德皇太子就于高橋妃之亡入阿弥尼公終焉之地也

應永十四丁亥 拾六月十八日 欽門宗圓敬記焉

相傳推古天皇六年戊午聖德皇太子高橋の妃の亡此入阿弥尼公終焉の地よ就て七區の煉若を敷建一以冥福を資の舊跡なり



吐五水

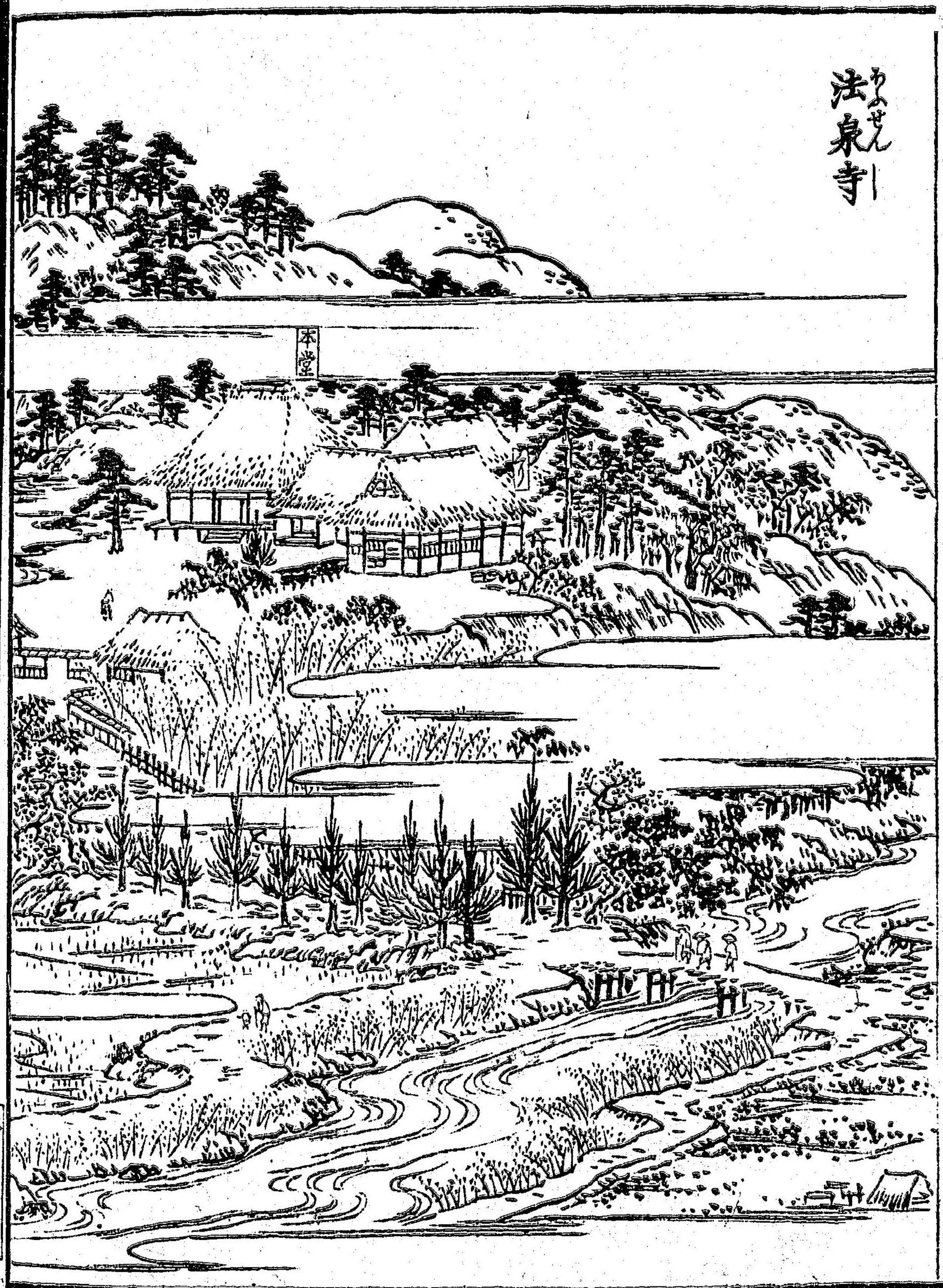


標して以て寺の遠大を祀せり  
後建長禪師者虚空藏經一軸を贈るのみ  
石室巖形禪師の抄墨墨押しに寄す  
康平年間八幡太郎義家奥州征伐出陣の時中路に宿を其頂當  
寺本より用運を祈る後果して感遇を獲るも昔小澤小太郎重政毎  
晨歩を像前を旋して現當の善因を修す然も其災を遭く寺宇既に  
敗壞をもうり年久し爰に鎌倉建長寺の大安禪師大方慶和尚此地に  
早錫して荒庵を興し如く禪風を振ふる故に僧俗雲集也  
或云建長寺  
八十四世慶  
和尚是なり大方慶然も永徳二年壬戌鎌倉左兵衛督氏満師の徳操を  
慕ひて参詣するの次三個の殿宇を造営せられたり  
三個の所相  
大會堂  
大會堂  
大會堂

展翼峰 壽福寺の左に積り山と云俗に神明山とのり形鳥の翼故  
展翼と云如く故に号す相傳當社神明宮に昔小机より飛来してに  
鎮座なりと云壽福寺十  
境の二なり  
浅間山同一山積り山頂は浅間の小祠あり名とす其入城の浅間山

と云是も壽福寺十境の一なりと光照崖と号す荆棘を多き小  
藤をまげ登るに數十步絶頂に至り崖は臨みて眺望せれば眼界  
蒼茫と云く山水の美筆端は尽くか  
浅間の祠あり必  
下りて小澤の城跡と稱する  
吐玉泉 壽福寺より後の方の谷を隔て西の山際農氏の地より水源  
白砂を吹出せたる号と云昔小澤の白清水といふ是も壽福寺  
十境の一なり

大谷山法泉寺 吉祥院と号す壽福寺の南十町を隔て菅村の  
内府中道の右にあり  
縮毛領中  
小澤郷に属し 天台宗の中深大寺村の深大寺よ  
属せり阿弥陀如来をかまるとす  
薬師堂 寺より西の傍に一町半あり毎歳八月十三日獅子舞あり  
本寺薬師如来の像は慈覚大師彫造り相傳左馬頭義朝の  
御臺所常盤御前護持の靈像なり文治三年丁未八月叡山の文



躰阿爾梨此地の領主猶も三郎重成と共に謀り當山を闢き  
一字の梵刹とて此靈像を安置せし後平政子河前崇教あり  
其頃頼朝卿より香花の資料とて當國高麗郡の地を寄  
附せし建久八年丁巳頼朝卿當寺へ詣り又康元二年丙辰  
五月頼朝公頼經公の菩提の御堂再興なり又ひより大伽  
藍となりし正慶建武の兵亂に廢壞せしより後曰貫は復さ  
るなりとて鐘堦唐木小札等は二品に頼朝卿の寄附なりと云  
傳く當寺の什宝とす

江戸名所圖會天璣之卷畢

